
DTストーリー～インヴェルズの侵略～

機甲竜騎兵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DTストーリー〜インヴェルズの侵略〜

【Nコード】

N5865P

【作者名】

機甲竜騎兵

【あらすじ】

ガスタの巫女、ウィンダ。
リチュアの少女、エリアル。

ある日、二人は出会った。同時に、それは戦いの始まり――。
敵対するガスタとリチュア。その真実と、その戦いを深き闇の奥より見つめる瞳があった。

これはデュエルターミナルの世界を自己流にアレンジして紡がれるストーリー。

友達（前書き）

これはデュエルターミナル第十弾『インヴェルズの侵略!!』の世界を自己流にアレンジした小説です。

『自分が考えていたのと違う!』など自身の考えと共有できない方は回れ右して下さい。

あと、この小説中に出てくるキャラ及び世界は全て、以前書いたデュエル小説のキャラと世界とは別物です。

向こうは『カードの精霊世界』、こっちは『デュエルターミナルの世界』とお考え下さい。

友達

これは他愛もない会話から始まる物語――。

「あ、そうだ。父様、姉様。明日友達がくるけどいい？」

緑色の髪をポニーテールにした少女が言った。

折りしも時間は夕食時。食卓を挟んで少女の前には深緑の髪を持つ男と、少女よりも薄い緑の髪を持つ女、そして少女の横には緑色の羽毛を持つ鳥が、目の前に置かれた餌を啄ばんでいる。

「友達ってウインちゃんかい？ いいよ」

男がそう言ったのに続き、

「ええ。冷たい飲み物とおいしいお菓子を用意しておくわ」

女が微笑みを浮かべながら言った。

「やった。よかったね」

少女は喜びながら、隣で餌を啄ばんでいる鳥へ笑顔を向ける。鳥は少女と喜びを分かち合うように、ピーッと一度大きく鳴いた。

湿原にいくつもの柱で支えられた木道の上に、木や藁で出来た家が建ち並んでいる。できる限り軽い素材で建てられたその家々は、木道によって繋がられ、上から見ると幾何学的な模様きかがくてきとなっている。

「こんにちわー」

その内のとりわけ大きな一軒を、黄色い羽と体を持つ、小さな竜のような生き物を引き連れた少女が訪れた。手にはエメラルドのような宝石がついた杖を持っている。

少しすると家の中から、『はい』と言う元気な声が聞こえ、ドアが開けられる。

「遅かったね、ウィン。何かあった……の……？」

肩に鳥を乗せた少女は、ウィンと呼んだ少女を見て——と言うように、ウインの後ろに隠れるようにいる、水色の髪と黒をベースにしたローブを着ている少女を見て、少し驚いた。

「あ、紹介するね、ウィンダちゃん。この子エリアルちゃん。さつき里の外で会ったの」

ウインは緑色の髪を持つウィンダに、自分の後ろに隠れている水色の髪を持つエリアルをそう紹介した。

「へえ……はじめまして！ 私ウィンダ！」

そう言って、ウィンダは明るい笑顔で右手を差し出す。

「えっと……はじめまして。エリアルです」

エリアルもそう言って、両手で持っていた鏡のような宝石がついた杖を左手で持って、ウィンダの握手に応じる。

「エリアルってすごくキレイな髪と瞳をしてるね。まるで海みたい」
ウィンダは握手したまま、エリアルの瞳を覗き込むように言った。
「あ……ありがとうございます。ウィンダさんもキレイですよ」

「さん”なんてつけなくていいよ。さっ、入って”
手を握ったまま、ウインダはエリアルを家へと上げる。ウインも
そのあとに続く。

「あら、ウインちゃんにプチリュウ。いらっしやい」

木で出来た廊下を走っているウインを、居間から出て来た女がそう話しかけた。

「カームさん。お邪魔してます」

ウインは立ち止まり、カームと呼んだ女に向き直ってお辞儀をする。横にいるプチリュウと呼ばれた生き物も真似して頭を下げる仕草をする。

「あとで部屋に飲み物とお菓子を持って行くわね。ウインダにもそう――」

そこまで言って、カームの言葉は止まった。ウインダに手を引かれ、廊下を走っているエリアルの後ろ姿を見て。

「ウインダ！」

階段を駆け上がろうとするウインダを、カームは少し語気を強くして呼び止める。いつもの口調と違うカームの声に、ウインダもウインも驚く。

「カーム姉様……？ どうしたの？」

恐る恐るウインダはエリアルを引き連れてカームの近くへ歩み寄る。同時に自分が何か悪いことでもしたのか考えるが、特に思い当たる節はない。

「ウインダ。その子は？」

カームはエリアルを少し睨むような目つきで聞いた。その視線に、

エリアルはウィンダの後ろに隠れるように身を引く。

「この子はエリアル。ウィンが里の外で会ったって……」

「はい。里の外で一人寂しそうにしていたので、声をかけたんです。それで、ちょっと強引に連れて来たって言うか……」

ウィンダが投げかけた言葉のボールを、ウィンがしっかりとカームへと返す。

「里の外で一人……？ このガスタの里の外は大湿原が広がっている。用もなく訪れるような場所じゃないけど？」

カームの視線はさらに鋭くなってエリアルに突き刺さる。

「えっと……私の家系は、代々一定の年齢になると大自然の力と脅威を肌で感じるために、占いで出た場所で一人で生活する風習があるんです……。それで、私の場合は“湿原”の占いが出て……」

カームの問いに、エリアルはおどおどとした口調で答えた。その顔は今にも泣きそうである。

「カーム、ウィンダ。どうした？」

カームが出て来た居間から、今度は男が出て来た。

「ウィンドールさん……」

ウィンは困った顔をしたまま、ウィンドールと呼んだ男を見た。

ウィンドールは何があつたのかと不思議な顔で歩み寄ってくる。

途中ウィンに笑顔で挨拶したあと、再び顔を戻してカームの後ろに立った。

「父様……」

「どうした、カーム？」

カームは一瞬躊躇したが、左に一步身を引き、その先にいるウィンダの後ろに隠れているエリアルを見せた。

その瞬間、ウィンドールの顔色が一変する。険しい表情になり、

カームと同じようにエリアルを睨む。

「ウインダ、その子は？」

ウインダールはウインダの顔を見ることなく、エリアルを警戒するような目で聞いた。

「なんなの！ 父様もカーム姉様も！ 私の友達のエリアルがなんだって言うの！」

カームとウインダールの態度に、ウインダがついに怒りを露^{あらわ}にする。

「もう行こ！ エリアル、ウイン」

「待て、ウインダ！」

ウインダールの制止を無視し、ウインダはエリアルを引き連れて階段を上って行く。ウインはどうするべきか迷っていたが、カームとウインダールに困った顔で無言で頭を下げ、ウインダとエリアルを追いかける。

「父様……あの子……」

三人がウインダの部屋に入ったのを確認して、カームが話を切り出した。

「ああ……。あの杖、間違いない。孤島に追いやられた聖教者の末裔——リチュアの一族だ」

部屋に入り、ウインダは怒り心頭と言った面持ちでベッドの上に座る。

「父様も姉様も、どうしてあんな顔でエリアルを見るのかな」

そう言って、今度は申しわけなさそうな顔になり、

「ごめんね、エリアル。いつもはあんな風に他人を警戒することなんてないんだけど……」

とエリアルに向かって謝った。

「ううん。仕方ないよ。だって、私だけ違う属性のよそ者だし……」

「そんなの関係ないよ!」

沈んだ顔で諦念感ていねんかんの漂う口調で言ったエリアルに、ウィンダは素早く否定する。

「父様や姉様だって、昔はよく来ていたエリアルと同じ属性の氷結界の人達とは仲良くしてたし。それにエリアルは私の友達。ウインの友達。ウインも私の友達。ね? これでここにいる三人は皆友達。友達に属性も何も関係ないよ」

ウィンダはそう言って満面の笑顔をエリアルに向ける。エリアルはその笑顔に戸惑いを感じたが、後ろにいるウインを見ると、ウインとプチリユウも同じ笑顔をエリアルに向けていた。

それを見て、エリアルは堪こらえていた涙を流しながら、二人に『ありがとう』と何度も繰り返す。二人は慰めるように、エリアルに寄り添う。

しかし、二人は気づかなかった。涙を流すエリアルの口元が、怪しく吊り上がっていることに。

ウィンドールは居間にあるイスに腰かけ、食卓に両肘をつけている。カームは窓の外の大湿原を見つめていた。

「リチュアの一族……かつては氷結界の一族内で特別な儀式を行う聖教者達だったが、力を求める余り暴走し、邪教徒と呼ばれ一族を追われた者達……」

ウィンドールは真剣な顔で、独り言のように呟いた。

その言葉にカームが続き、

「行き着いた場所は、この大湿原の先にある、沖合の小さな孤島……。ここ数年は、特に目立った動きを見せていなかったけれど……」
と言つて、ウィンドールの向かいのイスに座る。

「何か仕掛けようとしているのかもしれない。警戒はしておこう」

「でも、ウィンダにはどうやって説明しましょう……。あの子、エリアルを友達だつて……」

カームのその言葉に、ウィンドールは少しの間口をつぐむ。

「ウィンダは戦うにはまだ幼い。このことは今しばらく黙っておこうか」

ウィンドールの提案に、カームは複雑な表情で一瞬黙り込む。

「そうね……。その方があの子のためよね……」

カームの沈んだ面持ちに、ウィンドールも視線を落とす。

しかしすぐにカームに向き直り、右手をカームの肩に乗せ、

「大丈夫だ。まだエリアルが何かすると決まったわけじゃない。もしかしたら本当にただの修行かもしれないだろ」

と言つてカームを元気づける。

ウィンドールは窓際に移動して指笛を鳴らす。するとトサカを持つ深い緑色の翼をした一羽の鳥が、ウィンドールの腕に止まる。

「エリアルを監視してくれ。何かあったらすぐに知らせよう、仲間にも伝えてくれ。頼むぞ、イグル」

ウィンドールがそう言うと、イグルと呼ばれた鳥は頷くように首を縦に動かし、再び空へと飛んで行った。

ウィンダ達三人は部屋でママゴトや他愛もないお喋りをし、途中飲み物とお菓子を持って部屋に入って来たカームに少し空気が重くなったが、すぐに明るさを取り戻してお喋りを続けた。

そうしている内に、日が傾き西の空から夕暮れの色が広がり始めた。

「もうこんな時間だ。そろそろ帰らなきゃ」
ウインは窓から外を見ながら言った。

「そう言えば、エリアルはどこで寝てるの？」
帰り支度を手伝っているウィンダが聞いた。

「えっと、海岸で野宿してるよ」

その問いに、エリアルが当たり前のように答える。

「の、野宿？ 大丈夫なの？」

「うん。一応訓練したし。私、水の扱いは少し得意だから」
驚くウィンダに、エリアルは少し照れながら答える。

「へえ……エリアルってたくましいね。あたし達とそんなに歳も変わらないのに」

ウインが感心した様子で言った。ちょうど帰り支度と部屋の簡単な掃除を終え、最後に自分の杖を持つ。

ウィンダはエリアルとウインを玄関まで送り、また明日遊ぶ約束をして二人を見送る。

振り向くと、廊下にカームとウィンドールが立っている。

「……」

ずいぶんと反抗的な態度を取ったあとなので、ウィンドは反射的に二人と少し視線を逸らす。

一瞬の沈黙が訪れたあと、

「今日は私が夕飯の当番だよね。すぐに準備するね」

と言ってウィンドはでき得る限りの作り笑顔をして、そそくさと二人の間を通り過ぎ、居間へと入って行った。

そんなウィンドを見て、カームは少し気まずそうに、

「エリアルのことにも気になるけど、まずはウィンドと仲直りしないとね」

と言った。

「……そうだな」

ウィンドールが同意すると、二人はお互いの顔を見交わして苦笑し、ウィンドのあとに続く。

里の外まで、エリアルとウィンはお喋りをしながら歩いた。

里を出たあと、ウィンは空から来たサファイア・ペガサスと呼んだ天馬に乗って、自分の家へと帰って行った。

ウィンに手を振って見送ったあと、エリアルは視線を下に落とす。そこには底の浅い湖沼こしょうが広がっている。

その水面みなもに、自分の上を旋回しながら飛ぶ一羽の鳥を見つけ、エリアルは小さく鼻でせせら笑う。その鳥は、ウィンドールにエリアルを監視するよう頼まれた、あのイグルだった。

そのあと、エリアルは里と反対方向に向かって歩いて行き、湿原の先に広がる海に出た。

風は穏やかで、海岸に打ち揚がる波も静かに一定のリズムを刻んでいる。沖合には小さな島が見える。

エリアルは波打ち際に歩み寄り、服が濡れるのも構わず膝を折り、水を覗き込むように座った。そして手に持つ杖で軽く水の上を叩く。上から見ると単に水遊びをしているだけにしか見えないが、その波紋の中から、黒髪の男の顔が浮かび上がった。

「状況はどうだ？ エリアル」

波紋に揺れる水面みなもに映った男が言った。

「上々よ。ヴァニティ。警戒はされてるけど、こちらから何もしなければ監視しにつけない、あまい連中よ」

エリアルはヴァニティと呼んだ男にそう言った。その目は、先程までの泣き顔や弱気な目でも、二人と楽しく遊んでいた時の目でもなく、冷たいものだった。

「ああ言うあまい連中は、後手後手の対応しかできない。こちらの思い通りに動いてくれているわ」

「だが油断はするなよ。いくらお前が“アレ”と心を通わせられるとは言え、お前に何かあったら、俺達は……」

ヴァニティは本気で心配している顔で言った。それに対し、エリアルは少し呆れ気味に、

「大丈夫よ。このまま予定通り計画を進める。皆にもそう伝えて」と返すだけだった。

「たまには義兄あにの心配を察してくれ」

「はいはい。じゃあね。お休み」

そう言って、エリアルはヴァニティが映った水面みなもに杖を横に走ら

せ、それによつて生まれた波紋でヴァニティを消した。消え際にヴァニティが何か言おうとしたが、エリアルには届かなかつた。

エリアルは立ち上がる。その顔に先程の冷たい目はなく、明るく
楽しげな顔だつた。

だがその瞳の奥には、沈みゆく太陽ですら照らせない、暗く冷たい光があつた。

友達（後書き）

実はこれ、以前別の場所に投稿していたものです。その場所は一度閉鎖され、復活しましたがこの小説自体は消えました。

閉鎖したのは十月三十一日で、これの最終回が投稿されたのはその約二週間前。閲覧期間が二ヶ月ぐらいいしかなかったと言う、ある意味レアな小説w

個人的な縛りとして、この小説中に出てくるキャラは『インヴェルズの侵略』までに収録されているカード（キャラ）しか出さないと言う自分ルールを作っています。

つまり『オメガの裁き』に収録されているカード（キャラ）は出て来ません。だけど出てこないだけで、存在はしています。

一応続編の『オメガの裁き』のストーリーも頭の中ではほぼ完成してるけど、できればその次の簡略ストーリー、または収録カードがある程度判明してから書きたいかな。

あ、最後に活動報告にある提案の回答もお願いします。

生贄（前書き）

以前別の場所で投稿した時と比べると、あちこち若干の修正を加えています。

例を挙げると、ウインの送り迎えをしているのがサファイア・ペガサスではなく、以前はシールド・ウイングでした。

生贄

「エリアルが遊びにくるようになって、今日で二週間か……」

ウィンドールは居間のイスに座って呟いた。

「ええ……」

カームは三人分の飲み物を準備しながら、力なく言った。

「この二週間、特に変わった動きは見せていない。家や里の中を調べている様子も、他のリチュアと連絡を取っている様子も。純粹に二人と遊んでいるだけのように見える」

「ええ……」

カームは準備し終えた三人分の飲み物を一旦食卓に置き、ウィンドールの向かいのイスに座る。

「正直、辛いな。自分の娘と同じぐらいの年格好の少女を監視し続けると言うのは……」

ウィンドールは右手で頭を支え、苦悩するように言った。

「でも、あの子がリチュアの一族であることには間違いないのだし

……監視は必要だと思う」

「そうだがなあ……」

しばしの沈黙が二人の間に訪れる。

「……里の外での監視を緩和しよう。四六時中どこにいても監視するのではなく、里の中と周辺にいる時だけにしようか」

ウィンドールの提案に、カームは少し考え込むが、

「そうね。あの子が寝泊りしている海岸は里から離れているし、そうしましようか」

と同意した。

「それじゃあ、飲み物を持って行くわ」

「ああ」

カームはイスから立ち上がり、用意していた三人分の飲み物を持ってウインダの部屋へ向かった。

それを見送ったあと、ウインダールも立ち上がって窓際に向かう。そして二週間前と同じように指笛を鳴らし、仲間達にエリアルルの監視の緩和を伝えた。

「そう言えば、このガスタの里にはガスタを守護する特別な存在がいるって聞いたことがあるんですけど」

飲み物を持って来たカームに、不意にウインが聞いた。

「え……？」

カームは一瞬ウインの隣りにいるエリアルルに視線を送る。エリアルルはまだカームに慣れていないのか、できるだけ目線を合わさないように下を向いていた。

それを見てカームは心苦しい気持ちになりながらも、ウインの質問に答える。

「ええ。『ダイガスタ』と呼ばれる、ガスタの守護者がいるの。残念ながら詳しくは教えられないけれど、あるべき乗り手にのみ乗りこなすことができるのよ」

それを聞いて、ウインが少し興奮気味に、

「そのあるべき乗り手って、カームさんのことですか？」

と聞いた。カームはそれに対し、微笑みながら『さあね』とだけ答え、部屋をあとにする。

「ねえねえ、ウインダちゃんはその『ダイガスタ』って見たことあるの？」

カームが部屋を出ても、ウインは興奮冷めやらぬままウインダに聞いた。

ウインダは少し気まずそうに、

「え？ ええーっと……うん。見たことないよ」

と首を横に振りながら言った。

「そっかぁ……。でもガスタの守護者って言われるくらいだから、いつでもガスタの皆を見守っているよね」

「うん。きっとそうだと思う」

そう言って二人は笑った。エリアルも一緒に笑うが、その笑顔は二人と違い、邪念を宿していた。

その日もいつもと同じ時間に、同じようにエリアルとウインはガスタの里をあとにした。

ただ一つ違っていたのは、昨日までエリアルが寝泊りしている海岸までついて来ていたイグルが、途中で帰ったことである。

それを確認した瞬間、エリアルは今までに見せたことがない邪悪な笑みを浮かべる。すぐに波打ち際に行って杖で水を叩き、ヴァニティを呼ぶ。

「ヴァニティ、監視が緩まったわ。近く計画を実行に移す」

「少し早計すぎないか？ もう少し時間を置いて……」

「平和ボケしたあいつらにはこれぐらいがちょうどいいのよ。五日後よ。準備をされていて」

それだけ言って、エリアルは杖を振るって水に映るヴァニティを消す。

「……」

エリアルは立ち上がる。少し濡れた服から水が滴るが、そんなことは気にせず沖合の島を見つめる。

「もう少しだよ、皆。もう少しで私達の復讐が始まる。私達に無実の罪を着せたヤツらに、それを疑いもなく信じたあいつらに……。あいつらの魂を私達の先祖に捧げる時が、もうすぐ……」

拳を固く握り締め、エリアルは言った。

五日後――。

エリアルはいつものように、ウィンと共にウィンダの家に遊びに来ていた。

「あ、そうだ。今日はウィンダにプレゼントがあるの」
そう言って、エリアルは懷に手を入れる。

「え、プレゼント？　なんで？」
ウィンダは不思議そうに首を傾げる。

「ほら、私が始めてここに来た時、カームさんとウィンダールさんを説得してくれたし……」

「あゝ、あの時。説得ではなかったけどね。ただ怒っただけだし」
少し気恥ずかしそうにウィンダは言った。

「それに……」

そこまで言って、エリアルの口は止まる。

「……それに？」

「……友達って……言ってくれたし……」

視線を落とし、顔を赤くして恥ずかしそうにエリアルは言った。
そんなエリアルを、ウィンダとウィンはキョトンとした顔を見合

わせて笑い、

「うん。私達は友達だよ」
と言った。

「で、プレゼントって何？」

ウィンダに言われ、恥ずかしくて固まっていたエリアルは慌てて服の中から一枚の鏡を取り出す。

それは金の装飾で覆われ、首から提げるための紐がついた、手鏡サイズの物だった。

エリアルはそれをウィンダの手に乗せる。

「わ……クレイ……。ホントにもらっていいの？」

受け取った鏡を両手で大事そうに持ちながらウィンダは言った。

「うん。友達の証……だから」

再び恥ずかしそうにエリアルは答える。

「ウィンダちゃんいいな」

ウインはウィンダの手にある鏡を覗き込んで言った。

「少し待っててね。ウインの分ももうすぐできるから」

「あたしの分もあるの？」

「もちろん。ウインも友達だもん」

そう言われて、笑顔になったウインはエリアルの両手を握り、上下に動かして喜ぶ。

その日もエリアルとウインは、いつもと同じようにウィンダの家をあとにした。

ウィンダもエリアルからもらった鏡を首から提げ、玄関まで二人を見送る。

ドアを閉めて部屋に戻ろうと階段を上っていたウインダは、偶然二階から下りて来ていたカームと鉢合わせた。

「二人は帰ったの？ ウインダ」

「うん。あ、ねえ見て姉様。この鏡エリアルからもらったの」

そう言つて、ウインダは首から提げている鏡を手に乗せてカームに見せた。

「エリアルから……？」

その名前にカームは訝^{いぶか}しむ。ウインダの手にある鏡をじっくりと見て、

「ねえウインダ。その鏡、ちょっと貸してくれない？」
と言った。

「えー。せっかく今日エリアルからもらったのに……」

「お願いっ。今晚だけでいいから。明日には必ず返してあげる」

嫌がるウインダに、カームは手を合わせて頼み込んだ。

「うー……明日には返してよ……」

そう言いながら、ウインダは渋々鏡を首から外し、カームに差し出す。

「ありがとう」

カームはそれを大事に受け取り、もう一度じっくりと鏡を見る。

「必ず返してよ」

念入りに言い残し、ウインダは部屋に入った。

カームは鏡を見ながら階段を下りて行く。鏡にはカーム自身の顔しか映っておらず、裏を返しても特に変わった所はない。

居間を覗き込むと、そこにはフライパンを片手に、鼻唄交じりに今晚の料理を作っているウインダールがいた。

「父様は今晚の料理当番だし……夕食のあとに相談しましょうか……」

そう呟いて、カームは夕焼け色の光が差す外に出た。

そのまま二階建ての家の隣にある納屋に入り、明かりを点ける。大小さまざまな物が置かれているが、主にガスタの鳥獣達が身に付けている鎧や装飾が大半を占めている。どれも整備が行き届き、すぐにでも使えそうだ。

カームはその内の小さな鎧かけを取り出し、納屋のほぼ中央に置いて鏡を提げる。

「考えすぎかもしれないけど……さすがに監視を緩めた直後に渡された物じゃあ、怪しいわよね……」

そう言って、カームは何度も鏡を調べる。

触ったり、擦ったり、軽く叩いてみたりといろいろ試したが、特に怪しい所はなかった。

「やっぱり考えすぎだったかしら……」

意外な結果にカームは拍子抜けする。

窓の外を見ると、すっかり夜の闇が空を覆っている。

「そろそろ父様の夕食が出来る頃ね……。一応、報告だけはしておきましょうか……」

そう呟いて、再び鏡を見たカームは驚愕した。

鏡の中に、先程まではなかった^{ドクロ}骸骨のような紋章が浮かび上がっていた。

「この紋章は……！」

それを見た瞬間、カームの顔は青ざめる。すぐに部屋から出ようとするが、鏡から伸びた無数の触手のような水に絡み取られる。

「二人とも逃げ——」

声を上げて危険を知らせようとしたが、触手の一本が開いたカームの口に浸入し、それさえも叶わなかった。

カームは必死で抵抗するが、次第に意識が遠のき、その体は光と

なつて鏡の中に吸収された。

「できたぞーっ」

夕食の準備を終えたウィンドールは居間から顔を出して言った。

「はい」

ウィンドは元気な声で返事をし、トタトタと階段を下りてくる。

「おや？ ウィンド、カームは？」

「カーム姉様なら、さっき私と入れ違いで下りて来たはずだけど」

そう言つと、二人はキョロキョロと辺りを見回してカームを探す
が、どこにもいない。

「この時間に散歩か？ あまり考えられないが…… ウィンドは先に
食べててくれ」

「ううん。私も探す」

首を横に振り、少し心配した顔でウィンドは言った。

「そうか？ ならとりあえず家の中を探してくれ。わたしは納屋の
方を見ってくる」

そう言つて、ウィンドは家の奥に、ウィンドールは外に出て納屋
の方へそれぞれ歩いて行く。

「明かりが点いている。やはり納屋か」

扉と窓からうつすらと漏れている明かりを見て、ウィンドールは
安心した顔になる。

「カーム。いるのか？」

そう言いながら扉を開けた。だが中には誰もいない。

「カーム？ いないのか？」

見回しながらウィンドールは納屋へと入る。しかし返事はどこか

らも返って来ない。

「おかしいな……」

さすがにこの事態を怪しんだウィンドールは深刻な顔をする。
ウィンドールはひとまず納屋の明かりを消し、外に出た。

ウィンドールは気づきようがなかったが、納屋の中央に置かれた
鎧かけに、あの鏡はなかった。

音を立てないように、湿原の茂みの中を何かが移動している。時
には水の中にゆっくりと入り、水中を移動する。

その何かはガスタの里を抜け、湿原の先にある海岸に出た。そし
てそれは、そこで待っていたエリアルの手握られる。

エリアルはそれ——ウィンダに渡し、カームを吸収した鏡を見て、
頬を吊り上げて笑う。

翌日。

太陽が天頂から少し傾いた頃、ウインはいつものようにサファイ
ア・ペガサスの背に乗って湿原へと降り立った。

飛び去って行くサファイア・ペガサスに手を振り、ウインはエリ
アルといつもの待ち合わせ場所へ歩いて行く。

だがその場所に、エリアルはいなかった。

「あれ？ 先に行っちゃった？ そんなわけないよね……まだ野宿している海岸かな」

そう思い、ウインは以前エリアルが野宿していると言っていた海岸へと歩いて行く。海岸まではそれほど距離でもないが、草や湖沼ようちうがあちこちにあるので、実際より遠く感じる。

「あ、いた。エリアルちゃん。どうしたの？」

海岸で海を見ながら立っているエリアルの後ろ姿を見つけ、ウインは手を振りながら言った。

湿原の草むらをかき分けて海岸に出たウインは、エリアルがいつもの黒のローブではなく、漆黒の鱗うろこのような鎧よろいを着ていることに気づく。

「あ、今日はいつもと違うね。どうしたの？」

そう聞かれ、エリアルはゆっくりと振り向く。その顔はいつもの優しいものではなく、鋭く冷たい視線がウインを貫く。

その視線を見て、ウインは一瞬ゾツと背筋が凍る。隣りのプチリユウは威嚇するように臨戦態勢に入った。

「エリアル……ちゃん？」

昨日までとあまりにも違うエリアルの雰囲気、ウインは少し動揺する。

エリアルは無言で片手で杖を回し、そこから発生した一発の水の弾を躊躇なくウインを撃った。

「キャッ！」

ウインは突然の攻撃に全く反応できず、当たりはしなかったが驚きのあまり尻餅をつく。

「エリアルちゃん……？ どうして？ どうしてこんなこと……！」

「どうして……?」

その質問にエリアルは小さく笑う。

「だって、私があなたに近づいた目的は、最初からこれだったもの」
笑いを堪えるようにエリアルは言った。その顔にも仕草にも、昨日までの面影はどこにも見えない。

「どう言うこと……?」

ウィンが言い終わると同時に、プチリュウはエリアルに突撃する。しかしエリアルはそれを鼻で笑い、杖から射出した水の弾でプチリュウを撃ち落とす。

「ピュイイ!」

撃ち落とされたプチリュウは一度バウンドしてウィンの前に倒れた。

「プチリュウ!」

ウィンはすぐに駆け寄り、倒れたプチリュウを抱き寄せる。大した怪我はしていないようだ。

「立ちなさい、ウィン。立って私と戦いなさい」

プチリュウを抱いているウィンに対し、エリアルは無慈悲に言った。

「知っているのよ。あなた達精霊使いと呼ばれる者達は、自分と同じ属性の者と魂を共有することによって、飛躍的に戦闘能力を上げる高等靈法戦闘術——『憑依装着』が使えることは」

エリアルという言葉に、ウィンは驚く。

「戦うなんて……」

「いいから。かかって来なさい」

指を曲げてエリアルは挑発する。

だがウィンは顔を下に向け、

「でも……」

と躊躇する。

そんなウインに、プチリュウは説得するように何度も鳴いた。

「そのプチリュウの方がまだ戦う気があるようね。そいつを殺したら、あなたも少しはやる気が出るかしら？」

そう言ってエリアルは再び杖を構え、水の弾を作り出す。

エリアルのその言動に、エリアルが本気で攻撃してくることを感じ取ったウインは覚悟を決め、プチリュウを胸元に抱き寄せる。

意識を集中すると、プチリュウの体はウインに取り込まれて行き、直後に猛々しい半透明な姿となって現れた。

その姿に、エリアルは攻撃の準備を止めて一歩退く。

「そうよ……それでいいのよ！」

ウインの憑依装着を見て、エリアルは興奮気味に高笑いを上げる。そんなエリアルを見て、ウインは戸惑いながらもエリアルから目を離さず、だが攻撃すべきか迷っていた。

「これであなたの魂の価値は高まった！ 私はこの瞬間を待っていたのよ！」

そう言ってエリアルはウインを指差す。それに対しウインは構えるが、エリアルの視線はウインからわずかに外れていた。

エリアルの視線のズレに最初に気づいたのはプチリュウだった。後ろを振り向こうとした瞬間、触手のような水にウイン共々捕らえられる。

「なっ、何？」

驚いたウインが振り向くと、そこにはカームを吸収した骸^{ドクロ}のような紋章が浮かび上がった鏡が、触手を出しながら宙に浮いていた。

「本当のことを教えてあげるわ。ウイン。あなたはカームと一緒に、

私達リチュアの“王”を降臨させるための生贄なの。けどただのあなたではカームと合わせても“王”を降臨させるための魂の対価が合わない。だから憑依装着によって、あなたの魂を高めてもらう必要があったと言うわけ」

意識が遠のいて行くウインにエリアルは言った。

「エリ……アル……ちゃ……」

その言葉を最後にウインの意識はなくなり、カームと同じように光となってプチリユウと共に鏡に吸収された。

カームとウインを吸収した鏡はエリアルのもとに飛んで行き、その手に握られる。

「これで“王”を降臨させる準備は全て整った。行くわよ、皆。ガスタを滅ぼすために」

エリアル言葉に呼応するように、海の中からリチュアの大軍が姿を現した。

生贄（後書き）

なんと偶然にも、相手フィールド上のモンスターを儀式のリリースにできる、『オメガの裁き』で出た新カードである『リチュアに伝わりし禁断の秘術』と同じような状況で生贄を確保しました。

これを書き終えたのは九月の中頃だったので、禁断の秘術の情報は一切ありませんでした（禁断の秘術の情報が出たのは十一月のVジャンプ）。

まさに偶然の一致ですw デュエルの状況では、相手フィールド上のカームとウィンのコントロールを奪ってリリースした、と言った所でしょうか。

儀式（前書き）

今回からバトルです。考えるのは好きだけど、書くのは苦手。
と言うか、得意なシーンなんてほとんどないんだけどorz

儀式

ウィンダ達の家の扉を、誰かがノックする。すると家の中からドタドタと慌てた様子の足音が聞こえ、勢いよく扉が開けられた。

「姉様！」

ウィンダが少し寝不足気味な顔で扉を開けたが、そこに立っていたのはカームではなく、漆黒の鎧を着たエリアルだった。

「あつ……エリアル。いらっしやい」

残念がるウィンダだが、でき得る限りの笑顔でエリアルを迎えた。

「ウィンダ。ウィンとプチリュウは来たかしら？」

そんなウィンダを見ながら、エリアルは薄ら笑いを浮かべて聞いた。

「え？ ううん。まだ来てないけど……」

突然の質問にウィンダは不思議な顔で、首を横に振りながら答える。

「そう……。なら、カームは見つかった？」

その質問に、ウィンダの背中にゾツと寒気が走る。

「エリアル……どうして……」

カームがいなくなったのは昨日エリアル達が帰ったあとなので、昼すぎに来たエリアルが知っているはずがない。

「これ、なんだか分かる？」

そう言って見せたのは、エアリアル首に提げてある鏡だった。

「それ……！ 昨日姉様に貸した……！」

事態が呑み込めないウィンダに、エリアルは続けて言う。

「よく見てみなさい。この鏡の中を……」

言われるがまま、ウィンダは鏡を覗き込む。そこに映っているの

はウインダの顔ではなく、触手のような水に捕らえられ、意識を失っているカームとウイン、そしてプチリュウだった。

「姉様？ ウイン！」

ウインダはますます混乱し、頭を抑えて泣きそうな顔になる。

「ウインダ！ 下がれ！」

居間から鎌のような杖を持ち出して来たウインダールが叫ぶ。

ウインダールはウインダに攻撃が当たらないよう気を使いつつ、素早くエリアルルの懐に向かって駆ける。

二人の会話の一部始終を聞いていたウインダールは、カームがいなくなった原因はエリアルルにあると確信した。

ウインダールは左下から逆袈裟ぎゃくけさに斬りかかる。しかしエリアルルは慌てる様子もなく、自分の杖で防御しつつ後ろに下がる。

ウインダールの攻撃も利用し、エリアルルは後ろに大きく跳んで二人と距離を取った。

「危ないわねえ。でもウインダが邪魔で、思い切り踏み込めなかった？」

「次踏み込めばいいだけだ。カーム達を解放しろ」

杖の先端を向けてウインダールは言った。

それに対しエリアルルはニヤリと邪悪な笑みを浮かべて、

「イヤに決まってるでしょ」

と答える。

「それに、もう私に近づくことはできない」

「何？」

そう言つと、エリアルルは左手で首から提げた鏡を外し、

「これより、この場所で、邪悪古代儀式イヒリチュアを行う！」

そう叫び、左手に持つ鏡を天へとかざす。するとエリアルルを中心

に風が吹き荒れ、鏡の鏡面から光が溢れ、それは一条の光となって雲を貫いた。

「な、なんだ！」

あまりの風の勢いにウインダもウインダールも腕を顔の前に出し、その隙間から前を見ている。

木道はガタガタと揺れ、水はエリアルを中心に渦を作り、草もエリアルを中心に揺れ、耐えられないものは宙を舞っている。

ウインダールは鏡から放たれている光の先を見ると、先程までそこにあった雲を押し退け、巨大な髑髏ドクロのような紋章が浮かび上がっていた。

「あなた達は、“儀式”とはどう言うものか知っている？」

風の中心にいるエリアルが言った。

「今では廃れた過去の風習と呼ばれているけど、“儀式”とは『心を通わす』ことなのよ」

「何……？」

「“儀式”により強大な力を持つ神に近しき者と心を通わし、魂の対価を払うことでこの世界に降臨させる——それが“儀式”」

風が吹き荒れる中、エリアルの声は不思議とハッキリと二人の耳に届いていた。

「まあ、“儀式”を行わず、魂を同調させるあなた達には分からないでしょうけど……」

吐き捨てるようにエリアルは言った。

「カーム達の魂は、私達の“王”の降臨に使わせてもらっわ」

「ッ……やめろ！」

ウインダールの叫びも空しく、

「もう遅い」

エリアルは無慈悲に言った。

エリアルが左手に持つ鏡はより一層強い光を空に浮かび上がった
髑髏ドクロのような紋章に届け、その全てが放たれると、今度は髑髏ドクロのよ
うな紋章が光を放つ。

「降臨せよ！ リチュアの“王”——ソウルオーガ！」

エリアルが空に浮かぶ髑髏ドクロのような紋章に叫ぶと、紋章の中から
数十mはあるうかと言う巨大な魚人のような者がゆつくりと現れ、
足下にあったガスタの里の家や木道を踏み潰し、大きな波を起こし
ながら地に足を着ける。

そして世界に下り立ったことを喜ぶように、耳を劈きく叫び声を上
げた。

「こ……これが……！」
イヒリチュア

「そう。これが邪悪古代儀式の経典に記された“王”の一人、ソウ
ルオーガ」

ソウルオーガを背に、エリアルは言った。

「今その力を見せてあげるわ。ソウルオーガ！」

エリアルに言われ、ソウルオーガはもう一度大きく鳴き、水かき
のある両手の中に巨大な水の塊を作り出していく。そしてそれを里
の外の湿原へと勢いよく放った。

水の塊は湿原に着弾すると、大地を巻き上げ、巨大な水柱を上げ
る。その衝撃は波を作り、水柱が落ちるとさらに巨大な波が湿原に
広がり、ガスタの里も揺らす。

水の塊が着弾した場所には、湖とも言える大きな池が作り出され
ていた。

ウインダはソウルオーガの力を目の当たりにして、膝を着き目を
見開いて固まっている。ウインダールは恐怖に震えそうになる体を
必死に抑えていた。

「どう？ 素晴らしいでしょう？」

エリアルという言葉に、ウィンドールはその恐怖に負けないようにエリアルを睨む。

「もうやめろ！ エリアル！」

「あら？ そんな悠長なことを言っているヒマがあるのかしら？

——それより、何か聞こえない？」

そう言つて、エリアルはソウルオーガが攻撃した方向に耳を向ける。ウィンドールはエリアルとソウルオーガの動きに気を配りつつ、同じ方向の音を拾う。

それは地鳴りにも似た音だった。音と言つより大勢の声である。

「聞こえたかしら？」

クスクスと笑いながらエリアルは言った。

ウィンドールが目を凝らして見ると、声が聞こえる先から霧のよ
うな水煙が立ち上がっている。

「さっきのソウルオーガの攻撃は、ただ単に力を見せつけただけじゃない。海岸に待機していたリチュア軍が進軍するためのルートを確認したのよ。水上や水中では私達の方がはるかに有利だからね」
エリアルが言ったとおり、湿原の水位がソウルオーガの攻撃によりかなり上がっていた。リチュア軍はその上を闊^{とき}の声を上げながら大軍で押し寄せて来ている。

「さあウィンドール。あなたはどうするの？ ソウルオーガとリチュア軍を止めてみせない？」

挑発するように言うエリアルに、ソウルオーガもその巨軀^{きょく}を動かして家々を破壊して行く。混乱した人や鳥、獣達が逃げ惑い、絶叫が飛び交うその様は、まさに地獄絵図だった。

ウィンドールはその光景を見て歯を食い縛りながら、その場で家の二階へと跳躍する。そこはウィンダの部屋であり、その中からウィンドールはエメラルドのような宝石がついた一本の杖を取り出し

た。

「ウィンダ！」

そう言つて、ウィンダールはその杖をウィンダへと投げる。ウィンダはあまりのできごとに涙を流しながら放心状態だったが、ウィンダールの言葉に反射的に反応する。

投げられた杖を受け取るうとするが、一度落とし、慌てて胸元に拾い上げた。

その様子を見て、ウィンダールは苦渋の顔になる。

それでも自らの杖を天に掲げ、

「来い！ イグルス！」

と叫んだ。

ウィンダールの言葉に呼応するように、風が巻き上がる。

エリアルは風の行く先を睨む。その風は草を舞い上げながら空へと昇って行く。

その空の先から、何かがソウルオーガに向かって飛来してくる。

ソウルオーガもそれに気づき、叩き落とそうと右腕を伸ばした。

だがそれはソウルオーガの腕を避け、脇をすり抜ける。そしてウィンダールの近くでほぼ垂直に急上昇し、振り向いてゆっくりと木道に足を着けた。

それは巨大な緑の翼を持つ驚^{ワシ}のような鳥だった。ウィンダールが立つ二階建ての家よりも高く、威厳に満ち溢れた立派なトサカをしている。

「あれがダイガスタ……！」

エリアルは多少の驚きを含んだ声で言った。しかしすぐに余裕の顔になり、

「で？ どうするの？ そいつに乗って私を倒すの？ ソウルオーガに襲われている仲間達も助けずに？」

と言つて含み笑いをする。

ウィンドールは怒りと憎しみの目でエリアルを睨みつつも、唇を噛み締めてイグルスの背に乗り、その背中にある手綱を両手で掴む。
「行くぞイグルス！」

ウィンドールが言うと、それに応えるようにイグルスは甲高い鳴き声を発し、翼を広げて羽ばたく。風があたかも台風のように吹き荒れ、イグルスの巨体は少しずつ宙に浮いていく。

その巨体や翼が家々に当たらない程度の高さまで上がると、ウィンドールを乗せたイグルスはソウルオーガへと向かつて飛んで行った。

「本当に、あまい男……」

飛んで行くイグルスを見ながら、エリアルは蔑むあやうような目と言った。

「でもそれ以上に、あなたには呆れるわ。ウィンドー」

膝を着き涙を流すウィンドを、エリアルは見下して言った。ウィンドはそんなエリアルを泣きながら見上げる。

「あなたは泣くことしかできないの？ それは戦いには必要ない。分かつてる？ これは戦争なのよ」

エリアル言葉に、ウィンドは何も言えずにうな垂れ、ポタポタと大粒の涙が木道の上に落とす。

「エリアル！ 無事か！」

そう言いながら、イルカのような頭を持つ魚人に乗ったヴァニティが、水の上から駆けつけた。見ると、リチュア軍がついにガスタの里に到達し、木道や家々を破壊し、人や鳥獣達を襲っている。

「来たわね、ヴァニティ。見ての通り問題ないわ」

「そうか……良かった」

ヴァニティと下にいる魚人は心底安堵した顔になる。

「それで、その小娘は？」

ウィンダを睨みながらヴァニティは聞いた。

「私の『友達ごっこ』の相手よ」

「と言うことは、そいつがウィンダか……。どうするんだ？」

「どうもしないわ。こんな腰抜け、する必要もない。私はこれからソウルオーガのもとに行って、うつつらしいイグルス^{ハエ}を落としてくる。ヴァニティ達は里の制圧を最優先に行動して」

エリアルはウィンダを見下したまま言った。ヴァニティがソウルオーガの方を見してみると、だいぶ遠くの方に移動している。

「一人で大丈夫か？」

エリアルに心配した顔を向けてヴァニティは聞いた。

「相変わらずヴァニティは心配性ね。大丈夫よ。こいつは私が適当にあしらっておくから、皆の指揮をお願いね」

「……分かった」

渋々ながらヴァニティは了承し、リチュア軍を指揮するために反転する。

「さて、もうあなたに用はないわ。そこでこの里が滅ぶのを見るもよし、惨めに逃げるのもよし。逃げ切れるかどうかは保障しないけど」

クスクスと笑いながら、エリアルは左手に持つ鏡を再び首に提げる。

「もう……」

「ん？」

ウィンダが小さく発した声に、エリアルは興味がなさそうに耳を貸す。

「もうやめて！ エリアル！」

ウィンダは顔を上げ、必死に絞り出した言葉でエリアルに訴えた。涙は飛び散り、目は充血している。

その言葉にエリアルは心底呆れた顔で、

「親子揃って同じことを言わせるのね……」

と言い、

「イヤに決まってるでしょ」

とウィンダールに言った時と同じように、邪悪な笑みを浮かべて答えた。

「どうしてこんなことをするの？ 私達、友達だったんじゃないの？」

ウィンダの言葉に、エリアルは少し不愉快に顔になる。

「あなた達は何も知らないのね……。あなた達ガスタとヤツらが、私達リチュアにして来た“罪”を……」

「“罪”……？」

「その無知も“罪”よ、ウィンダ」

そう言って、エリアルはソウルオーガに向かって歩いて行く。

「そうだ。気まぐれに教えてあげる」

歩みを止め、顔を半分だけ振り向けたエリアルが言った。

「実はね、カーム達を助ける方法はあるのよ」

エリアルはその言葉に、ウィンダはすぐに反応する。

「本当？」

「ええ。私の首に提げてある、この儀水鏡……これを破壊すればね」
そう言って、エリアルは鏡——儀水鏡の紐に指を絡め、鏡面をウィンダに見せた。

「カーム達は今この儀水鏡に閉じ込めている。そしてこの儀水鏡を通じてソウルオーガに魂を与えている。つまり、この儀水鏡を破壊すればカーム達を解放できるし、ソウルオーガも倒れるでしょうね」

「そこまで言ってエリアルは一度鼻で笑い、
「まあ、あなたのような戦うこともできない腰抜けには不可能でしょうけど」

とつけ足した。

「そうそう。気まぐれついでにもう一つ教えてあげる」

そう言って、エリアルはウィンダに背中を向け、歩きながら話す。
「逆らう者には容赦しないけど、基本的にはこのガスタの里にいる者達は生かして捕らえるつもりよ」

その言葉に、ウィンダは少し驚いた。

「ただし、生かして捕らえた者達も新たなリチュアの“王”を降臨させるための生贄だから、結局この里にいる者達は皆殺しと言うわけだけだね」

だが次に出たその言葉に、ウィンダは絶望する。

「ああでも、ウィンドールとダイガスタであるイグルスはここで殺しておかないと、余計な希望を与えることになるわね」

エリアルは最後に独り言のように言った。

風が吹き始めた。それは今までと違い、複雑な軌道を描きながら
少しずつ強くなっていく。

エリアルは突然吹き始めたその風に歩みを止める。

「何……？」

左右を見回し、風の動きを見る。そしてその風は自分の後ろに向かって集まっていることに気がついた。

振り向いて見てみると、そこには目を擦って涙を止め、立ち上が

っているウインダがいた。その目には新たな涙が流れ出そうとしているが、それ以上にその目には決意の色がにじみ出ている。

ウインダは杖を両手で持って天高く掲げ、

「来い！ ガルドス！」
と叫ぶ。

ウインダを中心に吹いていた風はその言葉に合わせ巻き上がり、空へと昇って行く。その空の先から何かか一直線にウインダに向かって下りてくる。

それは地面につく直前に体の向きを変え、ウインダの横にゆっくりと下り立った。

「そいつは……まさか……！」

エリアルはウインダの横に下り立った、イグルスより二周りほど小さいが、それでも十分巨大な緑の翼と棘のついた鎧を着た鳥を見て、

「ダイガスタ！」

目を見開き、驚きを隠せずにいた。

儀式（後書き）

儀式モンスターに対する自分の考えは、昔の遊戯王ゲームに由来します。

昔の遊戯王ゲーム、特にゲームボーイ時代の遊戯王には、優劣関係ある『召喚魔族』と言う概念がありました。

炎魔族は森魔族に強く、森魔族は風魔族に強く、風は土に、土は雷に、雷は水に、水は炎に強いと言う関係図。

この『召喚魔族』には三系統あり、これの他に黒魔族は白魔族に強く、白魔族は悪魔魔族に強く、悪魔魔族は幻想魔族に強く、幻想魔族は黒魔族に強い。

そしてこの優劣関係に一切影響されず、純粹に力で戦うことができる『召喚魔族』が神魔族です。

神魔族は基本的に儀式でのみ召喚できる特別な存在です。もちろん例外は存在し、原作の神のカードであるオベリスク、オシリス、ラーは普通に生贄召喚できます。

しかしそれ以外は基本的に専用の儀式魔法と、指定されたモンスターを生贄にしなければ召喚できません。とにかく手間がかかりますが、一度召喚されればそれ以上の攻撃力を持つモンスター以外では破壊が困難になります。

とは言え、もちろん魔法や罫でも対処はできます。そこまで深刻に考えるほどでもありませんが。

ちなみにOCGの一部のカードにも専用の儀式カードがあります。
代表としては青眼の究極竜とか。
ブルーアイズ・アルティメットドラゴン
アルティメットドラゴン

脳内設定として、究極竜は神をも超えるそのあまりにも強すぎる力を自ら封じるため、三体の青眼として分かれている、と言うものがあります。使われることはないでしょうけど。

連携（前書き）

儀式召喚は心を通わし、シンクロ召喚は魂を同調させ、融合召喚は文字通り肉体を融合させる。

って言うのが自分の中の設定。

ゼアルで出て来た『エクシーズ召喚』の詳細はまだ不明ですが、
いったいどんなシステムなんだろうね。

連携

「まさか、あなたもダイガスタのあるべき乗り手だったとはね……。ウインダールかカームかと思っていただけ」

自嘲するようにエリアルは笑った。

「でも、あなたのような腰抜けでも駆れるダイガスタなんて、大したことないわね」

エリアルの言葉に、ウインダの横に立つガルドスは戦闘体勢に入ろうとするが、ウインダはそれを左手で制止する。

「エリアル……その鏡を——儀水鏡を渡して」

ウインダは左手を差し出して言った。

その言葉にエリアルは一度鼻で笑い、

「何度言わせればいいのかしらね……。イヤに決まってるでしょ」と答える。

「それに、強大な力を持つ者を呼べるのは、あなた達だけじゃないのよ」

「え……？」

エリアルはニヤリと笑い、右手に持つ杖を掲げる。

「来なさい！ マインドオーガス！」

エリアルが叫ぶと、すぐ下の湿原の水の中から絹を引き裂いたかのような甲高い鳴き声が聞こえ、直後に何かが飛び出して来た。

水柱を上げ高く飛び出たそれをウインダは見上げる。エリアルの隣に下り立ったそれは、大きさの異なる妖しくも美しい青い瞳を左右に三つずつ持ち、脚のような六つの突起物を持つ魚のような生物だった。

ウインダに向かって威嚇するように鳴くと、胸ビレと背ビレが羽

のように開く。

「どう？　美しいでしょう？」

マインドオーガスの頭に手を乗せてエリアルは言った。

「この子はね、昔私達の先祖が“儀式”により降臨させた、リチュアの“王”の僕^{しもへ}なの。当時は心を通わすことができず暴走し、私達の住む孤島周辺に野生化して棲んでいたけど、私は心を通わせることができた。今ではマインドオーガス達は、私達リチュアと共存している」

頭を撫でられ、マインドオーガスはエリアルにあまえるように身を寄せる。それでもエリアルもマインドオーガスも、ウィンダとガルドスの警戒を解くことはなかった。

「来なさい、ウィンダ。あなたの持つ些細で無駄な希望を打ち砕いてあげる」

そう言っ、エリアルはマインドオーガスの上に飛び乗る。

ウィンダは一瞬躊躇したが、カームとウィン、そして里にいる全員を救う決意を改めて固め、ガルドスの背に乗り、左手で手綱を掴む。ガルドスはそれを確認すると、翼を羽ばたかせ、その巨体を木道から浮かせる。

エリアルは空中から自分達を見下ろすガルドスを見て、一度小さく笑ったあと、

「いくわよ、マインドオーガス」
と呟いた。

するとマインドオーガスは痙攣するように小刻みに震えだし、頭部が左右に開く。

「えっ……！」

その光景に、ウィンダは顔を引きつる。上からだとその内部がハッキリと見え、血管や筋肉のような線維がうねるようにひしめき合

っている。

だがマインドオーガスの頭部が開いた直後、それらの線維はまるで意思を持っているかのように動き、小さな空間を作った。

エリアルは躊躇なくその場所に体を沈める。下半身が全てマインドオーガスに納まると、エリアルの腕と顔に赤い模様が現れ、手に持つ銀色の杖は金色へと変わっていく。

そして杖が全て金色に変わると、先端にある鏡のような装飾に、ドクロ 髑髏のような紋章が浮かび上がった。

「エリアル……！」

マインドオーガスと一体となったエリアルを見て、ウィンドは複雑な顔になる。

「そうそう……一つ言い忘れていたわ……」

そう言って、エリアルはウィンドを見上げる。その顔は赤い模様が現れた影響もあるだろうが、先程までとはまるで別人のような顔だった。

「儀水鏡を破壊すれば二人を助け出せるけど、早くすることね。魂が全てソウルオーガに与えられたら、儀水鏡を破壊して解放できても、それは魂のないただの肉体……いずれ真の死が訪れる」

エリアルは杖を振り上げる。すると下の水から木道を突き破り、小指ほどの小さな水の弾がいくつもエリアルの周りに浮かび上がった。

「いくわよ」

言って、エリアルが杖をガルドスに向かって振るうと、水の弾は一斉にガルドスに向かって飛んでいく。

「ガルドス！」

ウィンドが手綱を引いて叫んだ直後、ガルドスは一度鳴いて翼で風を打ち、左へ移動する。水の弾は次々と生み出され、木道を貫き

ガルドスを狙い続ける。

手綱を左手で握ったまま、ウインダは杖を振り上げる。すると杖の宝石のような装飾から青白い雷のようなものが現れ、ウインダはそれを襲いくる水の弾に放つ。

「念導か……！」

そう呟いて、エリアルは木道から飛び下りて増水している湿原に入る。ウインダが放った雷は水の弾を悉く打ち消し、先程までエリアルがいた木道に当たり、水の弾で穴だらけになっていた木道を完全に破壊する。

エリアルは水の中を、上半身だけを出して高速で移動する。その先にはイグルスを追って里の外まで出たソウルオーガが見える。

ウインダもガルドスに命じてエリアルを追うが、水中でのエリアルの下半身となっているマインドオーガスは速く、差は縮まる所か少しずつ広がっていく。

後ろを追いかけてくるガルドスに一瞥を投げ、エリアルは小さく笑う。そして右手に持つ杖の先端を水に浸けた。

杖は水を割り小さな波をあとに残すが、次第に杖の先端に水が綿飴のように纏わりついていく。エリアルがそれを軽く持ち上げると、纏わりついた水は湿原と繋がったまま杖についてくる。

上半身を捻り、エリアルはその水を槍のようにガルドスに向かって投げた。

「わっ……！」

ウインダはとっさに手綱を引いて上へと回避する。水はガルドスの下を通りすぎたが、同じ水を通して繋がっている杖をエリアルが動かすと、まるで生き物のようにくねり、再びガルドスに向かって襲いかかってくる。

「蛇みたい……！」

ウインダの言う通り、それはまさに水の蛇だった。エリアルが動かす杖に合わせ、水の蛇はガルドスを執拗に追う。

ウインダは水の弾を打ち消した時と同じように念導を雷状に放つが、水の弾とは比べ物にならない水量の前にほとんど意味がない。

そうしている間にも、エリアルはどんどん先に進み、距離を離される。

だがウインダがエリアルを見ると、自分とガルドスを追い回している水の蛇の体が動くことなく、エリアルの持つ杖と繋がっている様子を見た。

よく見ると、水の蛇が実際に動いているのは頭に当たる先端のみで、他の部分は動くことなくその場に滞留^{たいりゅう}している。

それを見たウインダは一つの可能性を気づき、

「ガルドス、上に！」

と指示を出す。ガルドスはそれに従い、ほぼ垂直に急上昇する。

水の蛇もそのあとに続く。

水の蛇が追って来ているのを確認し、ウインダはガルドスを急停止させる。そして水の蛇が当たる直前にガルドスの向きを反転させ、水の蛇を避けると同時に今度は垂直に急降下していく。

ウインダは飛ばされないよう手綱をしっかりと握り、足を踏ん張っている。杖を右手に構えると、宝石のような装飾から念導を風のように発生させる。

ウインダはそれを刃の形にし、カマイタチのようにして下にある水の蛇の体に向かって気合いと共に放った。

刃は水の蛇の体を両断する。直後、エリアルの支配下から離れた水の蛇は動きを止め、形をなくして湿原の水へと帰っていった。

それを確認して、ガルドスはエリアルを再び追いかける。

「へえ……わざと先端以外は動かさなかったとは言え、思ったより落ち着いて対処したわね。ただの腰抜けではないみたい」

そう呟いて、エリアルは杖についている水を解いて前を向く。エリアルは支配下から解放された残りの水の蛇の体も、湿原へと帰っていった。

水の中を泳いでいたマインドオーガスは脚のような六つの突起物を使い、水の底を走るように移動し始めた。

「水位がだいぶ下がったわね。里からかなり離れたか」

エリアルが振り向くと、ガルドスのさらにその先に、煙を上げている里がかなり小さく見える。

「まあ、リチュアの皆を巻き込まずに戦えるからよしとしましょう」
そう言つてエリアルは再び前を見る。ソウルオーガはもう目の前にいた。

ソウルオーガは両手を振り動かし、イグルスを叩き落とそうとしている。イグルスもその攻撃を必死で避け、背中にいるウィンダーがウィンダーと同じように念導を雷状や刃にして反撃するが、ほとんど効いていないようである。

そのソウルオーガの脚に、マインドオーガスは跳びついた。そしてほぼ垂直のソウルオーガの脚と背中を難なく登り、右肩に辿り着いてイグルスを見る。

「エリアル……！　なんだ、その姿は……！」

下半身がマインドオーガスと一体となっているエリアルを見て、ウィンダーは驚愕する。

「気にしなくていいわよ、ウィンダー。ダイガスタを二体共葬るためには、この姿の方がやりやすいのよ」

「ダイガスタを……二体？　まさか……！」

ウィンドールが上を向くと、ソウルオーガを飛び越えてガルドスに乗ったウィンダが追い着いた。

「父様！」

「ウィンダ！」

旋回し、ガルドスはイグルスの近くに滞空する。

『いいのか……？』

ウィンドールの声はウィンダの頭の中に直接聞こえて来た。

『うん。エリアルと……戦う』

ウィンダも直接言葉をウィンドールに送るが、その言葉にはまだ迷いの色が見て取れた。

『そうだ父様。カーム姉様とウインを救う方法が分かったの』

『何！ 本当か？』

『うん。エリアルが首に提げている鏡——儀水鏡って言うらしいけど、あの中に二人が閉じ込められていて、このソウルオーガに二人の魂が与えられているらしいの』

それを聞いて、ウィンドールはエリアル首から提げられている儀水鏡を見る。エリアルとソウルオーガは動かず、二人の動向を余裕の顔で見っていた。

『なるほど……つまりあの儀水鏡を破壊すれば、二人を解放でき、ソウルオーガも倒せると言うことか』

『うん。でも急がないと、二人の魂が全てソウルオーガに与えられたら、もう……』

ウィンダは泣きそうな声で言った。

『ならばそれより早く破壊すればいいだけだ！』

ウィンドールは自分にも言い聞かせるように叫ぶ。

『わたしがソウルオーガを引きつける。ウィンダは儀水鏡を』

『はい、父様！』

ウィンダとウィンダールの二人は、エリアルとソウルオーガを睨んだ。

「どうしたの。二人とも黙って。親子がこの世で出会った最後の機会だから待ってあげてるのに、あの世に旅出す前の挨拶はしなくていいの？」

そう言っただけでエリアルは高笑いをする。

「いくぞウィンダ！」

「はい！」

二人はそう声をかけ合い、ガルドスは真上に浮上し、イグルスの背に乗るウィンダールは雷状にした念導をエリアルに向かって放つ。

ウィンダールが放った攻撃はソウルオーガが左手で防いでエリアルには届かなかったが、エリアルはそれ以上に二人の行動に疑問を抱いた。

そしてソウルオーガの手で視界が狭まっているエリアルの上を、ガルドスを通りすぎてソウルオーガの背後に回る。

「ずいぶん息の合った動きね……。会話もせずなぜ——」

そこまで言っただけで、エリアルは見当がついた。

「なるほど。念導により相手の頭に直接声を送る『念話』と言うものね。小賢しいマネを」

そう呟いて、エリアルはソウルオーガの背中に移動する。マインドオーガスの脚のような突起物は、ソウルオーガの筋肉のわずかなくぼみにもしっかりと入り、顔を下に向けているが落ちることはなかった。

「念話での別れの挨拶は終わった？ もうさっきまでの小手調べの攻撃はしないわよ」

エリアルは見上げるような視線で言った。そして杖を構えると、握り拳サイズの水の弾丸を生み出していく。

ウィンダも杖に青白い雷状の念導を発生させる。そして二人は同時に攻撃を放った。

ウィンダは雷状の念導を網の目に放ち、広範囲に攻撃する。対するエリアルは直接ガルドスに向けて水の弾丸を撃つ。

水の弾丸は念導の網に当たり多少勢いを削られたが、そのままエリアルに命中する部分の網を突き破ってガルドスに飛んでいく。ガルドスはそれを左に動いて避けるが、直後に高速で飛んで来たビームのような水を避け切れず、腹部に命中した。

マインドオーガスの口から放たれたビームのような水の直撃を受け、ガルドスは墜落していく。だが途中で持ち直し、再び上空に舞い戻った。命中した腹部の鎧は砕け、バラバラと地上に落ちていく。しかし鎧に守られていたとは言え予想以上にダメージは大きく、腹部からは血が染み出し、体も少しフラついている。

「ウィンダ。あなた程度の力じゃ、私を倒すどころか儀水鏡を破壊することさえ不可能よ」

嘲笑してエリアルは言った。

「ん……？」

その時、エリアルは足下——心を通わせているソウルオーガの前——から妙な気配を感じ取った。

エリアルはガルドスの動向をマインドオーガスに見てもらい、ソウルオーガの脇からイグルスの様子を見る。

そこにいたのは、頭をもたげて体を起こしているイグルスと、その頭のトサカの横に手綱を離して立っているウィンダールだった。ウィンダールは杖を両手で持ち、後ろに構えて力を集中させる。

杖の先端には強い念導の流れが風を巻き起こしている。

「ハアアアアッ！」

気合いと共にウィンドールは杖を振り、特大の念導の刃を放つ。直後にイグルスも翼を動かし、念導の刃に風を纏わせた。

「なるほど。それがあなたの全力ね。ソウルオーガ！」

エリアルに言われ、ソウルオーガは両手を前に突き出し、風を纏った念導の刃を受け止める体勢を取る。

「あなたがいくら全力を出そうとも、ソウルオーガは倒せないことを証明してあげるわ！」

エリアルが言った直後、ソウルオーガは念導の刃を受け止める。

ソウルオーガと念導の刃の衝突で湿原の水は激しく波打つ。風は吹き荒れ、エリアルもソウルオーガの背中にしがみついている。

念導の刃はソウルオーガの巨体をわずかながら後退させるが、ソウルオーガがさらに力を込めると念導の刃は霧散し、消え去った。

渾身の力を込めた攻撃がソウルオーガの掌を少し傷つけただけの結果に、ウィンドールは絶望する。念導の刃が纏っていた風はソウルオーガを通り過ぎ、後ろに流れる。

「所詮、あなたがどんなに力を振り絞ろうとも、ソウルオーガの手を少し傷つけるのが限界みたいね」

言って、エリアルは勝利を確信したかのように高らかと笑った。

笑っていたエリアルが、不意に違和感を感じた。先程までソウルオーガの後ろへ流れていただけの風が、少しずつ上に昇っている。

見上げると、ウィンダが掲げている杖の宝石に、風と霧散したウィンドールの念導が集まっていた。

「まさか……さっきの攻撃は、ウィンダに念導を送るための……！」
驚くエリアルに、ウィンダは自分とウィンドールの念導を練り合ねせた青白い念導を、一条の光としてエリアルに放った。

「くっ……！」

エリアルは大急ぎで水の弾丸を作り、念導の光を撃ち消そうと放つ。だが念導の光は曲がりくねり、逆に水の弾丸を全て撃ち落とし、落としていく。

マインドオーガスが放ったビームのような水も撃ち消し、念導の光はエリアルに迫る。

とつさにエリアルは腕で頭を防御する。しかし念導の光はエリアルではなく、首に提げられた儀水鏡の紐とエリアルの服を少し斬り裂いただけで、エリアル自身には攻撃しなかった。

「しまった……！」

紐を斬られた儀水鏡は重力に従い下へと落ちていく。エリアルは左手を伸ばすが、届かない。

「エリアル……言ったよね。私の力じゃエリアルを倒すことも、儀水鏡を破壊することもできないって」

落ちていく儀水鏡を見ながらウィンドは言った。

「だったら、私と父様の力を合わせればいいだけ！」

ウィンドは力強くそう言うと、念導の光は儀水鏡を貫き、破壊した。

儀水鏡が破壊された瞬間、ソウルオーガの動きは止まり、小刻みに震えだした。

「ソウルオーガ！」

エリアルは泣きそうな顔でソウルオーガの背中に手を当てる。しかし直後に何かに気づき、ニヤリと笑った。

破壊された儀水鏡から、カームとウィンとプチリュウが元の大きさとなって解放された。

「ガルドス！」

落ちていくカーム達を救うため、ウィンダに命じられたガルドスは、大急ぎでカーム達の下に回る。ウィンダは念導でカーム達の落下の速度を緩め、ガルドスの背中で受け止めた。

「姉様！ ウイン！ プチリュウ！」

カーム達を救えたことに、ウィンダは涙を流しながら喜んだ。しかし、カーム達の目は覚めない。

「姉様？ ウイン……？」

体を揺らすのが、反応がない。そしてウィンダはあることに気づくが、それをすぐに口に出すことも、理解することもできなかった。

ウインが持っていた杖がガルドスから落ちる。それが地上の湿原に落ちてしびきを上げると、ウィンダは目を見開いてそのことを口にした。

「息………してない………よ………？」

その言葉にウィンダールも驚き、絶望する。

「残念！ あと一歩遅かったわね！」

絶望し動くこともできないウィンダに、エリアルは勝ち誇った声で言った。ソウルオーガも満足したように叫び声を上げる。

「二人の魂は、今！ 全てソウルオーガが吸い尽くしたのよ！」

そう言っ、エリアルは今までで一番の笑い声を上げる。

連携（後書き）

しかし……あれだな。この小説を自分でも読むのは約三ヶ月ぶりだけど……なんと拙いorz

特に戦闘シーンがヒドイ。かと言って今書き直しても大して変わらないんだけどorz

それにしても今さらですが、5D'sが終わっちゃうんだよねえ……。なんだかんだで一番好きだったんだけど。

特にライディング・デュエルと言う新システムがよかった。今までのデュエルとは一線を画すデュエルシステムだったし。

あれのおかげでデュエルの新たな可能性と魅せ方ができたと思うし。さてはて、ゼアルはどう言う感じになるのでしょうか。

突破（前書き）

どうも自分は霊使いの方のエリアとかリチュアのエリアルとか、
エリア系に悪人のイメージを持つようです。

ただどちらも理由がある悪なんですけど。

突破

「これでソウルオーガの力は完全解放された！ そのこのいる動かなくなつた生贄には感謝しているわ！」

エリアルは笑う。高らかに。

その笑い声も耳に入らず、ウィンダは絶望する。どうしていいか分からずに、動かないカームを大粒の涙を流しながら抱きかかえている。

「諦めるな！ ウィンダ！」

エリアルの笑い声を遮り、ウィンダールは叫んだ。その目にはウィンダと同じく涙が流れているが、絶望し切つてはいない。

「他人の魂をすぐに自分のものにできるわけがない。カーム達の魂が完全にソウルオーガのものになる前に、こいつを倒せればまだ助かるはずだ！」

ウィンダールにとって、それは根拠のない希望的観測だった。だがそれを信じることで、折れそうになる自分の心を支えようとしているのが目に見えて分かる。

「へえ……なかなか鋭いじゃない。ただの勘かもしれないけど、その通りよ」

そう言つて、エリアルはソウルオーガの右肩によじ登つてウィンダールと対峙する。その顔は余裕と自信に満ち溢れている。

「たしかにまだカーム達の魂はソウルオーガに吸い取られただけで完全にソウルオーガのものになっているわけじゃない。カーム達の魂を捕らえているソウルオーガを倒せば、捕らえられている魂は元の持ち主に帰るでしょうね」

そこまで言つてエリアルは一度鼻で笑い、

「でもそれは無理ね！ 完全解放されたソウルオーガを倒すなんて

ことは不可能よ！」

と言つて再び高らかに笑う。

「無理じゃない」

エリアルルの笑い声を、今度はウインダが遮った。

振り向くと、ウインダはカーム達を地上に降ろしていた。そして
涙ぐんだ目でエリアルルを睨み、

「無理なんかじゃ、ない！」

ウインダは涙を振り払うかのように叫び、ガルドスに乗ってイグルスの隣りまで飛んでいく。

隣り合つたガルドスとイグルスを見て、

「そう……だったら、やってみなさいよ！」

エリアルルのその言葉を合図にしたかのように、全員が動き出した。

エリアルルは無数の水の弾丸を作っていく。ソウルオーガは巨大な
水の塊を作り、そこから水の蛇を何体も生み出して攻撃する。

ウインダとウインダールはそれらの攻撃を紙一重で必死に避けながら、雷状の念導や念導の刃で反撃する。しかし、その全てがエリアルルの水の弾丸やソウルオーガの水の蛇に打ち消されていく。

「“罪”を犯したお前達は罰を受けなければならない！　それが道理よ！」

攻撃の手を緩めることなく、エリアルルは憎々しい声で言った。

「わたし達の“罪”とはなんだ！　エリアルル！」

「それが分からないことが“罪”なのよ！　ヤツらの言うことを疑いもせずバカみたいに信じることがね！」

イグルスは左右から襲ってくる二体の水の蛇を避けて衝突させるが、水の蛇はなんの問題もなく一体に融合し、そのままイグルスに襲いかかる。

「ヤツらとは誰のことだ！」

「決まってるでしょ！ 氷結界の一族よ！」

ガルドスはソウルオーガの背後に回るが、エリアルの水の弾丸の集中攻撃に反撃することもできず、カーム達のことと考えて再びソウルオーガの前に戻った。

「いつたいなんのことだ！ わたし達や氷結界が犯した“罪”とはなんだ！」

「それを知らないことが“罪”なのよ！ お前達は全ての“罪”を背負って地獄に堕ちる！ 閻魔大王に告げる罪名は『無知』よ！」

ウィンダールはウィンダを援護しつつ反撃するが、一つたりともエリアルにもソウルオーガにも届かない。

「くっ……！ そもそも氷結界は魔轟神との戦いで、三体の古代龍が暴走したことによって魔轟神共々滅んだはずだ！ “罪”に対する罰と言うのなら、彼らはすでに受けている！」

「そうねえ、そうだったわねえ！ 氷結界は舞姫らわずかな生き残りを残して滅びたわね！ でも私達の望みは、氷結界全員の死！ 一人たりとも生かしておけないのよ！」

ウィンダールは念導の刃で水の蛇を両断する。しかし、その陰で死角になっていた水の弾丸に反応できなかった。

水の弾丸の直撃を受けたイグルスは、湿原の水を巻き上げながら地上に落下した。

「父様！」

ガルドスはイグルスを追って地上に下りる。ウィンダはガルドスから飛び降り、落下の衝撃でイグルスから落ちたウィンダールにバシャバシャと水を蹴りながら駆け寄った。ガルドスもイグルスを心配している。

「ウインダ……」

起き上がろうとウインダールは右腕に力を入れる。その時、ウインダールの右腕に激痛が走り、再び湿原に倒れてしまった。

「腕が……折れたか……」

痛みに顔をしかめながら、ウインダールは左腕で起き上がろうとする。ウインダは涙と湿原の水でずぶ濡れになりつつも、起き上がるウインダールを支える。

「杖も頼む……」

そう言われ、ウインダは湿原の底に落ちているウインダールの杖を拾い、それを差し出す。ウインダールは杖を左手で受け取り、背中に背負った。

「ウインダ……最後の賭けだ」

右腕を力なく垂らしているウインダールが念話で言った。

その賭けの内容に、ウインダは驚愕する。

「そんなことをしたら、父様達が……」

「わたしとイグルスなら大丈夫だ。心配するな」

明らかに強がりだったが、ウインダールは不安にさせまいと痛みを堪えて笑顔を作る。

「それより、この賭けはウインダも危険だ。いけるか？」

「ッ……はい！」

ウインダは躊躇しつつも、力強く答えた。

「どうしたの！ また念話で話してるの？ 別にいいけど、早くしないと助けられないわよ！」

そう言ってエリアルは二人を見下しながら笑った。

そんなエリアルを睨みながら、ウインダとウインダールはガルドスとイグルスの背に乗る。

「イグルス…… もう少しだけ無茶につき合ってくれ」

ウィンドールは右腕の痛みに耐えながら、左手で手綱を掴んで咳いた。それに対し、イグルスは気にするなと言わんばかりに、一度大きく鳴いた。

そしてガルドスとイグルスは同時に空へと飛び立つ。

「ようやく戻って来たわね。何かいい作戦でも思いついた？」

クスクスと笑いながらエリアルは言った。

「落とした時にどうして追撃しなかったと思う？ あなた達にはカーム達の死と己の無力を最大限に与え、最高の絶望を感じてもらうためよ。私達リチュアが受けた屈辱と怒りを体感してもらうためにね」

二人を指差してエリアルは言った。その言葉には怒りと憎しみが滲み出ている。

「エリアル…… お前がなぜそこまでわたし達や氷結界を憎むのかは分からない。わたし達が犯した“罪”と言うのも、今は分からない」
ウィンドールは心を落ち着かせて言った。しかし次の瞬間、左手を握り締めて感情をむき出しにし、

「だが今は！ カーム達を救うことに全力を出させてもらおう！」

と叫び、イグルスはその場で急上昇する。そして一定の高さまで上がると、今度は急降下しながら猛スピードでソウルオーガに突進していく。

「やってみなさいよ！」

エリアルも叫び、水の弾丸と水の蛇をイグルスに向けて発射する。

イグルスは迫りくる攻撃を、そのスピードを落とすことなく紙一重で避けていく。

「あのスピードで避けるなんて……！」

イグルスの強靱な筋肉により生み出される翼の推進力と重力も利

用した加速力、そして空気の抵抗を極力抑える姿勢と念導の補助により、イグルスは凄まじいスピードでソウルオーガに迫る。

しかしエリアルはイグルスが水平飛行になり、ソウルオーガに対し正面から向かってくるのを見計らい、

「攻撃が避けられるのなら避けられないようにすればいいだけよ！ソウルオーガ！」

と命じると、ソウルオーガは自身で生み出した水の塊を湿原に落とす。水の塊は湿原に落ちると、湿原の水と交わり巨大な水の壁を作り出した。

「あのスピードと傷ならこの水の壁の強度はダイヤモンドにも匹敵する……なら——」

これまでの戦いで不透明になっている水の壁を睨みながら、エリアルは呟いた。そしてソウルオーガと共に水の壁の上へと照準を向け、水の弾丸を作り出す。

「ウインダールはこの水の壁を飛び越えて上からくる。だけどそうすると方向を変える時にスピードが落ちるから、格好の的ね」

エリアルは杖を、ソウルオーガは両手を上に構え、イグルスが現れるのを待った。

しかし、次の瞬間エリアルは驚愕した。

イグルスは水の壁をそのスピードを落とさずに突き破り、ソウルオーガの目の前に現れた。

「バカな！ そのスピードで水の壁にぶつかって自殺行為……！」
エリアルは慌てて目の前に現れたイグルスに照準を合わせようと

するが、イグルスは血を吐きながらスピードと高度が急激に落ち、地上に落ちていく。

「ハ……ハハ、奇襲としてはよかったけど、体が耐えられなかったみたい——」

そこまで言って、エリアルはイグルスの真後ろから続けざまに現れたガルドスに言葉を失った。

「まさか……イグルスを風除けと盾代わりに！」

ガルドスのスピードはイグルスを超え、体を回転させながら円錐形に展開した念導を纏い、ソウルオーガの胸に突撃した。

ソウルオーガは大気が震えるほどの絶叫を上げる。

ガルドスはソウルオーガの胸を貫き、巨大な風穴を開けた。

倒れていくソウルオーガの胸に開いた風穴から、三つの光の玉が現れる。光の玉は少しの間滞空したあと、カーム、ウィン、プチリユウの体の中に入ってしまった。

光の玉が入った瞬間、カーム達の顔色に生気が戻り、少し咳き込みながら息を吹き返す。しかし、まだ意識は失っている。

「姉様……ウィン……！」

カーム達を救えたことに安堵するウィンダだが、ガルドスの高度が急激に下がり始めた。突撃時の衝撃が強すぎたため、ガルドスは

意識を失っていた。

「ガルドス……！」

ウインダは手綱を引き念導でガルドスを支えようとするが、ウインダの力も底を尽きかけているため、ガルドスを支え切れない。

だが地上に落下する直前にガルドスは意識を取り戻し、翼を羽ばたかせる。しかし巨体を浮かせるには浮力が足りず、そのまま腹部から地上に落ちた。

ギリギリの所で落下のスピードを抑えられたため、ウインダはガルドスから投げ出されることはなかった。

エリアルは倒れていくソウルオーガの肩から落ち、放心した顔で空を見上げている。

「バカな……リチュアの“王”が……ソウルオーガが……一撃で……」

信じられないと言った口調でエリアルは呟いた。

そんなエリアルを、ソウルオーガは掌に乗せようと右手を伸ばす。だがエリアルが掌に乗る前に、ソウルオーガの体は光となって消えていく。

そしてソウルオーガが消えたと同時に、水の壁は崩壊した。

大量の水が一気に流れ落ち、辺りに巨大な波を作る。それは地上にいるウインダやカーム達を襲う。

ウインダ自身は念導で壁を作ってそれを防ぐが、未だ意識を失っているカーム達は無防備だった。

「姉様……！」

波がカーム達を呑み込む直前、イグルスが翼で跳躍するようにカーム達と波との間に立ちはだかり、左手で杖を持ったウインダールが念導の壁で全員を守った。

その様子を、エリアルは虚ろな目で見ていた。
そのまま何もすることなく、エリアルは頭から落ちていく。この
まま地上に激突すれば確実に死ぬ高さだったが、エリアルは最早何
かをする様子はなかった。

静かに目を閉じ、自らの死を待つ。

その時、エリアルの下半身となっていたマインドオーガスが動き、
空中で無理矢理体勢を変えてエリアルの代わりに顔面から地上に激
突する。立ち上る水柱の色は、少し赤らんでいた。

「マインドオーガス……！」

激突の衝撃でエリアルはマインドオーガスから離れ、湿原に投げ
出される。下半身に吸いつくようについていたマインドオーガスの
血管や筋肉の繊維は悉く千切れ、湿原の水でほとんどが洗い流され
た。

「マインドオーガス！」

エリアルはすぐに起き上がってマインドオーガスに駆け寄る。投
げ出されて左腕と左足に怪我をしたが、そんなことを気にもせずエ
リアルは泣きながらマインドオーガスに寄り添う。

どうしていいか分からず泣きじゃくるエリアルを心配させまいと
してか、マインドオーガスはあまえるように鳴く。しかし、その顔
の半分はすでに潰れ、辺りに赤い水が広がっている。

「イヤ……イヤ！ 死なないで！ マインドオーガス……！」

必死に叫ぶエリアルだが、マインドオーガスの命の灯火は消えよ
うとしていた。それでも、マインドオーガスはエリアルに何かを訴
える。

「そんな……マインドオーガスを……皆を置いて逃げるなんて……
！」

エリアルは首を横に振りながら言った。その顔や仕草には、先程

までの威圧的な態度は微塵も見取れない。

マインドオーガスの妖しくも美しい青い瞳は次第にくすみ出し、その瞳が完全に灰色に染まるまで、マインドオーガスはエリアルに訴え続けた。

エリアルは動かなくなったマインドオーガスの名前を何度も呼び、何度も体を揺らして起こそうとするが、マインドオーガスが目覚めますことはもうなかった。

その事実が分かった瞬間、エリアルは自嘲するように嗚咽おえつを漏らしながら小さく笑い出す。

「エリアル……」

ガルドスと共にウィンダールの近くに移動したウィンダは、エリアルを心配して顔で見る。

「この子はね……十数体いるマインドオーガス達の中で、一番私と仲が良かったの……。一番私と心を通じ合えたの……。一番の……私の友達だったの……」

そう呟いて、エリアルはウィンダ達を睨む。その目からは涙が流れている。

「それは……お前達リチュアがわたし達ガスタに侵攻して来たからだ！ お前達が来なければ——」

「自分の“罪”も知らないくせに！ そんなことがよく言えるわね！」

ウィンダールの言葉を遮り、エリアルは怒気を強めて言った。

エリアルは足元に落ちていた杖を拾い、小さな水の弾を作り出す。「あなた達が……あなた達が皆を——」

そこまで言っつて、エリアルは咳き込みながら膝を着く。杖を落とし口元を押さえた右手を見てみると、べつとりと赤い血がついてい

た。

「マインドオーガスと離れた副作用か……」

そう呟くと、怪我をした左腕と左足の痛みを感じ始めた。それでも震える右手で再び杖を掴み、それを支えにして立ち上がる。

「エリアルーツ！」

その時、ガスタの里の方角から声が聞こえた。見ると、ヴァニティが率いるリチュア軍が近づいて来ている。

「ヴァニティ……」

その姿を見て安心したのか、エリアルは体勢を崩して倒れ始める。そんなエリアルを、ヴァニティはギリギリで抱き止めた。

残りのイルカやタコの顔を持つ者や、海蛇のような体を持つ魚人や人のリチュア軍も追い着き、間に入ってウィンダ達に武器を構える。

「エリアル！　しっかりしろ！」

腕の中で目を閉じているエリアルに、ヴァニティは半分泣きそうな顔で体を揺らす。エリアルは蒼白し、息が荒い。

「ヴァニティ……里は……？」

うつすらと目を開き、エリアルはか細い声で聞いた。

「ほぼ制圧した。援軍に来ようと進んでいたら、ソウルオーガが倒れ始めたのが見えて急いで来たんだ」

エリアルはヴァニティの言葉に対し、『そう……』と答えるのみで、再び目を閉じる。

ヴァニティの言葉に反応したのはエリアルだけではなかった。

「ほぼ制圧したと……皆は、里の皆はどうした！」

ウィンダールがヴァニティに叫ぶ。ヴァニティはウィンダールを

睨みながら、

「お前達は“王”を降臨させるための生贄だからな。抵抗した者達には痛い目を合わせたが、基本的に生かしてある。多少制裁を加えることは許可してあるが」

と答えた。

ウィンドールはそれに対し何か言うが、ヴァニティはそれよりもエリアルルの状態を心配している。

「エリアルル……まさかマインドオーガスと……」

ヴァニティはエリアルルの横で息絶えているマインドオーガスを見て言った。

「……うん……ダイガスタと戦うには……そうする方が……良かったから……」

エリアルルは力なく、途切れ途切れに答える。

「マインドオーガスと一体となると力は増すが、離れた時にエリアルルの体への負担が大きいとあれほど……」

ヴァニティは心配した顔で言ったが、エリアルルは容体はかなり悪そうである。

エリアルルの状態を見て、ヴァニティは決意を固める。

「シャドウ！ 来てくれ！」

そう言うと、リチュア軍の中から杖を持った魚人が現れ、ヴァニティの前に立つ。

ヴァニティはエリアルルを横にして抱き上げ、

「エリアルルを頼む」

と言ってシャドウに渡す。

「全軍聞け！」

ヴァニティはその場にいるリチュア軍全員に聞こえるよう言った。「これよりエリアルルを逃がす！ 全軍一丸となってその身を盾とせ

よ！」

ヴァニティの言葉に、リチュア軍からは異論の声は一切聞こえず、同意するように雄叫びを上げる。

むしろヴァニティの言葉とリチュア軍の反応に驚いたのはウィンダールの方だった。

「エリアル一人を逃がすために全員が盾となるのか……？」

リチュア軍の行動をウィンダールは不思議に思った。

「待つて……ヴァニティ……。里を制圧したなら、勝利はもうすぐ……。私に構わず、侵攻を……」

エリアルは右手をヴァニティに伸ばして言った。ヴァニティはその手を両手で掴み、

「オレ達にとつて、エリアルの死は完全なる敗北なんだ」

と言つて手を離し、湿原に落ちているエリアルの杖を拾う。そして横になって抱き上げられているエリアルの上に杖を置く。

「心配するな。相手は全員負傷している。ダイガスタが相手でも大丈夫だ」

そう言つて、ヴァニティはウィンダ達と対峙する。

「わたし達の戦力はこれだけではないぞ」

ウィンダールはそう言つと、長く大きく指笛を鳴らす。すると湿原の草を掻き分け、鳥や獣達が集まり出した。

「ガスタの一族はこの湿原に棲む原生獣達と共存する一族。里にいるのはごく一部だ。ソウルオーガとの戦いでは危険すぎるため下がらせていたがな」

ウィンダールがそう言っている間にも鳥や獣達は次々と集まり、瞬く間にリチュア軍と同等かそれ以上の数が集まった。

「クッ……怯むな！　しょせん畜生の群れだ！　オレ達の決意を見せつけてやれ！」

ヴァニティはそう叫んだが、突然現れた大群にさすがのリチュア軍も少し浮き足立っている。

「シャドウ！ 行け！ エリアルを頼んだぞ！」

そう言われ、エリアルを抱き上げているシャドウは一度頷き、海岸に向かって走り出した。

「待って……ヴァニティ……！ お義理ちゃん！」

ヴァニティの背中にエリアルは叫んだ。ヴァニティはその言葉に一瞬反応したが、振り向くことなくリチュア軍に言い放つ。

「いくぞ！」

リチュア軍は武器を掲げて雄叫びを上げ、ガスタの大群へと向かっていった。

突破（後書き）

いよいよ次で終わりです。『インヴェルズの侵略』編の最後にして、『オメガの裁き』編への伏線です。

次は一度舞い戻って『シンクロ覚醒』から『トリシューラの鼓動』を一つの小説として書く予定。

え？ どうして『ヴァイロン降臨』がないかって？ 可愛い子がほとんどいないから！

……と言つのは冗談で、単に思いつかないだけです。ごめんなさいorz

そろそろ自分の中のキャラ設定を出すかな〜と言つことで、今回はガスタ方面の人達を――

ウィンダ

ガスタの巫女。ウィンダールの娘でカームの妹。

元気で明るく家族と友達思いな性格。一度友達と決めたら最後まで信じ抜く。

巫女と言つがまだ新米。しかしダイガスタであるガルドスのあるべき乗り手であり、潜在能力は充分にある。

カーム

ガスタの静寂。ウィンダールの娘でウィンダの姉。

普段はポ〜ツとしているが、いざと言う時の行動力と決断力は高い。

妹のウィンダを何より大事に思う優しいお姉さん。

ウィンダール

ガスタの賢者。ウィンダとカームの父親にしてガスタの長。

娘思いで子煩悩な性格。家事全般が得意で、特に料理の腕は一流。ダイガスタであるイグルスのあるべき乗り手であり、ガスタの鳥獣達も束ねている。

言葉（前書き）

これにて『インヴェルズの侵略』編は終了です。
長……くもなかったけど、おつき合いありがとうございました。

言葉

「ヴァニティ……と言ったな。一つ聞かせてくれ」

襲いくるリチュア軍をイグルスが翼の一振りで巻き起こした風で吹き飛ばしたあと、ウィンドールは言った。

「お前は……ウィンドールか。なんだ」

ヴァニティも空から襲ってくる鳥を、指の先で作った水の弾で撃ち落としたあと答える。

「お前達は——リチュアはなぜわたし達ガスタを憎む。ガスタと氷結界がリチュアに対し犯した“罪”とはなんだ」

ウィンドールの言葉に、ヴァニティは黙っていた。だが襲ってくる鳥をもう一体撃ち落としたあと、

「エリアルは何も話さなかったんだ……。いいだろう。懺悔のついでに教えてやる」

と言ってウィンダとウィンドールの顔を見る。ウィンドールは鳥や獣達に指笛でヴァニティを攻撃しないよう指示を出した。

「お前達は、ヤツら——氷結界の一族から、オレ達のことをどう教えられた」

ヴァニティは周りの警戒を解くことなく聞く。

「たしか……かつて氷結界の一族内で聖教者と呼ばれていたが、力を求めるあまり暴走し、一族を追われ孤島に逃げ延びた者達の末裔だと……。故に、同盟を結んでいるわたし達ガスタに監視を頼むと」
ウィンドールの答えに、ヴァニティは吐き捨てるように鼻で笑う。
「そんな嘘を本気で信じているのか」

ヴァニティの言葉に、ウィンドールは絶句した。

「な……に？　嘘？」

「そう。それは氷結界が吐いた真つ赤な嘘。オレ達の先祖は力なんて求めていない。ただただ氷結界に尽くしていただけ」

怒りを抑えた声でヴァニティは言った。そして拳を固く握り締めて語り出す。

「オレ達はな。捨てられたんだよ。氷結界に――」

かつて、オレ達の先祖達は氷結界の聖教者と呼ばれていた。“儀式”により強大な力を持つ神に近しき者と心を通わせることのできる一族としてな。

その力を使つて、かつては氷結界の統一や世界の平和など様々な局面で氷結界を陰から支えた一族でもある。古代龍を封印する際にもな。

だが“儀式”には手間と時間がかかる。まず道具の準備――今のオレ達の場合は儀水鏡だが――が必要で、これを作るには時間がかかる。何しろ神に近しき者と交信する最も重要な物だからな。

そして氷結界が何より嫌ったものが、生贄と言う考えだ。道具と生贄、この二つが揃って初めて神に近しき者を呼び出せる。

だがこの世界に完全に降臨させるのならまだしも、その姿や意思を聞くだけなら生贄の命まで取る必要はない。せいぜい生き血を少しもらっただけだ。

オレ達の先祖達も“儀式”の不便さを改善しようと努力していた。

道具製作の簡略化や生贄の代替とかな。

しかしヤツらは先祖達の努力も考えも全て無視し、冤罪^{えんざい}を擦^{なす}りつけて氷結界から追放した。わざわざ嘘の罪を作ったのは、外交的な理由だろう。

平和になった世に、生贄を必要とする力など災いの元凶と言う考えもあつたのかもしれない。

そしてオレ達の先祖達は、氷結界の言う『正義』とやらのせいで、現在の孤島に追いやられた。

それでもオレ達の先祖達は聖教者としての意志を枉^まげること、氷結界を怨むことはしなかったらしい。

だが、現実はそのを許さなかった。

元々非力な一族だったため厳しい外での生活などできるわけもなく、そして何より、孤島には先住民がいた。——魚人達だ。

彼らは先祖達を侵略者だと思い攻撃して来た。当時の彼らは文化レベルも低く、話し合いができる状態でもなかった。

やむなく先祖達は追放された時に密かに持ち出した、失われた禁呪法である邪悪古代儀式^{イビリチュア}の力を使い、魚人達を制圧した。

後に和平を結び、彼らと共存共栄の道を歩むこととなる。それが現在のリチュアと言う一族だ。

だが邪悪古代儀式^{イビリチュア}を発動させたことにより、問題が起きた。邪悪古代儀式^{リチュア}の経典の解説が不完全で、かつ“儀式”において重要な心を通わせることができなかった。

その結果、魚人達を制圧するだけの力は得れたが、“王”^{しもへ}の僕であるマインドオーガス達が暴走し、十数体が野生化して孤島周辺に棲みついた。

そのせいで孤島から出ることも外から入ることもできず、リチュアは完全に孤立した。

「——これが、リチュアの誕生理由だ」

ヴァニティの話に、ウィンダもウィンドールも言葉を失った。そんな二人をヴァニティは指差し、

「お前達の“罪”とは、氷結界の言うことをなんの疑いもなく信じ、オレ達をさらに陥れたことだ」と憎々しげに言った。

「知らなかった……イヤ、それが“罪”なのだ……。だが、なぜそれを話してくれなかった。そうすれば手を取り合って共存することも——」

「エリアルに監視をつけておいて！ よくそんなことが言えるな！」
ウィンドールの言葉を遮ってヴァニティは怒鳴る。

「監視つて……父様……！」

ヴァニティの言葉に驚き、ウィンダはウィンドールを見る。ウィンドールはウィンダとヴァニティの視線に耐えられず、顔を下に向けた。

「エリアルは監視の存在を最初から気づいていた。そしてお前と、そこで眠っているカームがエリアルを敵対視していたことも聞いている。そんなことをしていながら、手を取り合おうなどよく言えたな！」

そう言われ、ウィンドールは何も言うことができず、己の行動を恥じ、後悔した。

「お前達にオレ達の絶望が分かるか？ 一族に捨てられ、未開の地に追いやられ、死に物狂いで生き残り、多くの犠牲を払って百数十年ぶりに外の世界の情報が手に入ったと思ったら、氷結界と同盟を結んでいるほとんどの一族から敵視されていたオレ達の絶望が！」

そこまで言って、ヴァニティは一度唇を噛み締め、憎しみと怒りを爆発させるように、

「お前達に分かるか！」

と叫んだ。

叫んで、ヴァニティは昂^{たかぶ}つた感情を抑えるように息を整える。

「まあ、ここまでがお前達の“罪”……ここからは、オレの——イヤ、オレ達の懺悔だ」

そう言って、ヴァニティは下を向いて語り出した。

「オレには、脳裏に焼きついて離れない、エリアル^{エリアル}の顔が二つある

——」

あれは今から数年前。あの子がリチュアの長になる前の——イヤ、当時エリアルがリチュアの長になるなど、誰も思っていないかった。当時からオレ達は氷結界と、オレ達のことを見捨てた氷結界の同盟相手に復讐を願っていた。数百年の内に聖教者としての意思など消え失せ、オレ達を陥れた氷結界の一族を皆殺しにすることだけを目的に力を蓄えた。

与えられた絶望がそうしたのかもしれない。あるいは禁呪法と言われる邪悪^{イビリチュア}古代儀式の影響かもしれない。

だが、オレ達は聖教者の意思を捨てたことを後悔していない。

しかし問題があった。孤島周辺に棲みついたマインドオーガス達だ。

当時のマインドオーガス達は島に上がってくることで自体は少なかったが、海上に出ようとするときリチュアだろうと襲いかかってくる厄介者だった。

そのマインドオーガス達の群れの中を安全、確実に通り抜けるのが一番の課題だった。

オレも当時からリチュアの会議に参加していた。だが有効な対策もなく、積もるのは氷結界への復讐心だけ。

その日も実のある会議ではなく、オレは何か手がかりがないかと海を見渡せる岬に行った。

海の方こうに見える太陽に照らされた大陸に憎しみを放ちながらも、何もできないことにイラ立ちを覚えていた。

その時だ。海風に乗って聞き覚えのある声が聞こえたのは。

最初は聞き間違えかと思った。そうであってほしいと願った。

だがそれは間違いなく、マインドオーガスが多く出る立ち入り禁止の海岸から聞こえてくる。

「エリアル……！」

オレは全力で走った。あの子は両親を早くに亡くし、親戚であるオレが引き取った。

本当の妹のように、娘のように、家族のように育てた。オレも独り身だったから、あの子はオレの心の支えでもあった。

そしてエリアルは一族の皆からも愛されていた。あの子を失った

ら、一族全員の士気が落ちることは必至だ。

「エリアル！」

海岸に出たオレは、そこで信じられない光景を目にした。エリアルがマインドオーガスの背に乗って、楽しそうに遊んでいたからだ。他のマインドオーガス達も、エリアルと一緒に遊泳している。

「エ……エリアル？」

あまりの光景にオレの思考回路は一瞬止まった。マインドオーガスに襲われるどころか一緒に遊ぶなど、見たことも聞いたこともなかったからだ。

「あ、お義兄ちゃん！」

そんなオレの心境など気づいていない様子で、エリアルはオレに気がついてマインドオーガスの上から手を振る。

だがその時、手を上げたことでバランスを崩したエリアルが海に落ちた。同時に周りにいたマインドオーガス達も海に潜る。

「エリアルーッ！」

オレは頭を抱えて絶望した。十数体のマインドオーガスに襲われたら、肉片どころか骨すら残らない。

だが、そんなオレの絶望は杞憂きゆうに終わった。なんとマインドオーガスは再びエリアルを背に乗せ、海岸まで運んで来たのだ。

「えへへ……落ちちゃった」

全身ずぶ濡れになりながら、エリアルは気恥ずかしそうに笑った。その時のエリアルの顔は、何者をも拒絶しない、純真で無垢な笑顔だった。

それから少しして、エリアルは氷結界にいた頃の聖教者時代も合わせて、リチュア史上最年少の長となった。あらゆる者と心を通わ

せられる天性の才能を見込まれてな。

エリアルも最初は戸惑っていたが、一族の期待に応えるため、長の任に就いた。

これによりリチュアは安全に海を渡れるところか、マインドオーガスと言う強力な戦力も得れた。

とは言え、エリアルは長になったばかりだったので、すぐには攻め込まなかったがな。

さらにそれからしばらくして、オレはまた信じられない光景を見た。

夜、エリアルが今まで大事にしていた両親からのプレゼントであり形見であるおもちゃやぬいぐるみを、自らの手で焼いていたのだ。「エリアル……なんで、そんなことを……」

炎に揺らめくエリアルの横顔にオレは聞いた。

「お義兄ちゃん……私、今まで皆にあまえていた……。でも、私は長になったから。今度は、皆が私にあまえられる……。私は、そう言う立派な長になりたい」

燃えゆく形見の数々を見ながらエリアルは言った。

「だからって……どうして形見を……」

オレの言葉に、エリアルは小さく首を横に振り、

「自分にあまえちゃダメ。私がしっかりしなくちゃいけないから。私が皆を導かないといけないから。でも……」

そう言っ、エリアルは服の中から小さな鏡がついた金環きんかんを取り出した。

「これだけは、捨てられなかった……」

それはエリアルの両親が最後にプレゼントした首飾りだった。エリアルはそれを首につけ、

「私がお義兄ちゃんにいって呼ぶのも、今日が最後。これからも——」
そう言っ、エリアルはオレに顔を向けて、

「よろしくね。ヴァニティ」
でき得る限りの笑顔でそう言ったエリアルは片目からは、一筋の涙が流れていた。

「——それから、エリアルは寝る間も惜しんで勉学に打ち込んだ。経済学、儀式学、軍事学……まっとうことはかりごと政から謀までありとあらゆる知識を学び、長としての仕事もこなした」

語り終えて、ヴァニティは両手で顔を覆うようにし、あえぐような声で、

「オレはエリアルあの顔が忘れられない……！ あらゆる者を受け入れる純真無垢な笑顔と、己の覚悟に涙し、それでも笑っているあの顔が……！」

そう言つて、ヴァニティはウィンド達を睨む。

「だから、リチュアを見捨てたお前達を、オレ達は許さない……！」
怒りと憎しみと悲しみが織り交ざったかのような声でヴァニティは言つた。

「ヴァニティ……お前の愛は間違っている！ たしかにわたし達は真実を知ることが怠つた。だが、だからと言ってあんな少女にそんな重荷を……！」

「自分達が上に立っているような物言いだから、お前達はオレ達を理解することができないんだ！」

ウィンドールを指差してヴァニティは言つた。そして自分の胸に

手を当て、

「オレが間違っていることなんて、オレが一番よく分かってる！」
そう言うと、ヴァニティの目から一粒の涙が零れ落ちる。

「オレ達のエゴで、あの子を変えてしまった……！ ならば、オレ達のエゴで、あの子を護るしかないじゃないか！ この命に代えても！」

ヴァニティは嘘偽りのない、決意の目をして叫んだ。よく見るとその場にいますリチュア軍全員がヴァニティと同じ目をしている。

ヴァニティの話を聞き、ウィンダはただただ泣いていた。しかしその涙を拭い、

「父様……私、もう一度リアルと話しがしたい」

と言った。ウィンダールはウィンダの目を見て、

「分かった……援護する」

と返し、イグルスにも小声で伝える。

「ガルドス……もう少しだけがんばって」

ウィンダはガルドスの体を触りながら言うと、その背中に飛び乗って手綱を掴んだ。ガルドスはそれを確認すると翼を広げる。

「あいっ……リアルルの所に行く気か。全力で阻止するぞ！」

ヴァニティが言うと、周りのリチュア軍は目の前にいる鳥や獣を無視して一斉にガルドスに駆け出していく。

しかし、そのほとんどはイグルスが巻き起こした風に吹き飛ばされ、それ以外も先程まで相手にしていた鳥や獣に押さえられ、一人たりともガルドスのもとに辿り着けなかった。

ガルドスは翼を羽ばたかせてその巨体を宙に浮かせていく。
「クソ！ チェイン！」

ヴァニティに指示され、隣にいた海蛇のような体を持つ魚人は、手に持つ鎖つきの槍をガルドスに投げる。しかし、それも左手で杖を持ったウィンドールの念導の刃に撃ち落とされた。

「ヴァニティ、頼む。ウィンダを行かせてくれ」

ウィンドールは懇願こんがんするように言った。

「ふざけるな！ エリアルに危険を及ぼす者は全て排除する！」

飛び立とうとするガルドスにヴァニティは指先で水の弾を作り、照準を定める。

「わたし達大人の戦いはここで終わる！ これは子供達の話し合いだ！」

ウィンドールの言葉にヴァニティは一瞬ためらった。直後に水の弾を放ったが、それより一瞬早く、ガルドスはエリアルを追って全速力で飛び立った。

ガルドスを逃がしたことに、ヴァニティは後悔した顔で飛び去っていくガルドスを睨んだ。だが少しずつ顔を下げて、

「あの子はこの数年、『子供』のような振る舞いを見せたことは一度もなかった……。この作戦を遂行している間も、ずっと『大人』として振る舞っていた……」

そう呟いたヴァニティの顔は、自責の念で満ちていた。

「ヴァニティ……ウィンダが導き出す答えが、わたし達ガスタ、全員の答えだ」

ヴァニティはウィンドールの言葉を聞いたあと、静かにエリアルを逃がした方角に目を向けた。

エリアルを抱えたシャドウはひたすら走り続けている。エリアル
の息遣いは落ち着いていたが、まだ顔色は悪い。

「エリアル、海岸だ。もう少しの辛抱だぞ」

そう言ったシャドウの前には、湿原と海の境にある砂浜が見えて来た。

「いえ……まだよ……」

エリアルはシャドウの腕の中で言った。シャドウも立ち止まって後ろを振り向くと、少し遠くの空から緑の翼を持つ巨大な鳥が迫って来ている。

「まさか、ヴァニティ達が？」

「いえ、イグルスや他のガスタがいない……。多分隙を衝いて追って来たのね……」

そう言うと、エリアルはシャドウの腕から降りようとする。シャドウは止めようとするが、

「大丈夫……降りして……」

と言われ、渋々ながらエリアルを降ろした。

エリアルはふらつきながらも杖を支えに立ち、目の前に下りて来たガルドスを見た。

ウィンダはガルドスから降りてエリアルと対峙する。

心配した顔でエリアルを見るウィンダだったが、

「何？ あなた一人で私に会いに来たの？ その哀れむような目で私を見るために？」

エリアルにとって、それは侮辱に等しい目だった。

「違う。私は……ただ伝えたいことが……」

「伝えたいこと……？ 別れの挨拶でも言いに来たの？」

エリアルは皮肉まじりに言った。エリアルにとって『別れ』とは、死と言うことだった。

「……うん……」

小さくうなずきながら言ったウィンダに、エリアルは驚いた。同

時にシャドウはエリアルの後ろで、ウィンダを攻撃するために左手で光の塊を作る。

「私、エリアルに……ううん。リチュアの皆に謝りたくて」

ウィンダの言ったことをエリアルは一瞬理解できなかった。だがすぐに思い当たり、

「そう、ヴァニティが話したのね……。余計なことを……」
と苦々しく呟いた。

「謝ってすむ問題じゃないのは分かってる……。でも、これだけは言いたかったの」

自分にまっすぐ顔を向けるウィンダを睨みながらも、エリアルは静かに次の言葉を待つ。

「また……またいつか、一緒に遊ぼうね！」

「え……？」

ウィンダの言葉に、エリアルは心底驚いた。

「私、エリアルとウインの三人で遊べて嬉しかった。一緒に話して楽しかった。今すぐは無理かもしれない。だから――」

そこまで言って、ウィンダは澄んだ目でエリアルを見直し、

「だから今はさよなら！」

そう言ったウィンダにエリアルは驚きながら、複雑な顔を下に向けて後ろに振り向く。

「いくわよ、シャドウ……皆に合図を……」

そう言ってエリアルはシャドウの背中に乗る。シャドウもウィンダの言葉に驚きながらも、左手で作っていた光の塊を上空に投げ、沖合にある夕日に照らされた孤島へと泳いでいく。

時間は奇しくも、いつもエリアルとウインが家路につく時刻だった。

「また……いつか……」

去りゆくエリアルルの背にそう呟き、ウィンダはガルドスに乗って、エリアルとは逆方向へと飛んでいく。

シャドウが投げた光の塊はある程度の高さに達すると、炸裂して強い光を放った。

「合図だ！ エリアルが逃げ切った！ 全軍撤退！」

その光を確認してヴァニティは叫んだ。

リチュア軍は一斉に海岸へと撤退していく。それを追撃しようとする鳥や獣に対し、

「全員追うな！」

とウィンダールは制止した。何体かの鳥や獣はウィンダールに抗議するように鳴いたが、

「今のわたし達に、彼らを追う資格があるのか……」

ウィンダールがそう言うと、鳥や獣達は沈黙してリチュア軍を見送った。

「里にいるリチュア軍も引いているだろう。ウィンダはエリアルを逃がした。それがあの子の意思なら、わたし達はそれに従おう」

ウィンダールはそう言った。見ると、リチュア軍が撤退していく同じ方角の空から、ガルドスに乗ったウィンダが戻って来ている。

リチュアとガスタの戦いを、深き深淵の闇より見つめる瞳に、誰も気づかなかった――。

「以上が、斥候からの情報です」

両手が鎌のような形をしている、黒い甲殻を持つ虫のような者が言つて、静かに闇の中に下がる。

「最後はとんだ茶番だったなあ。ガザス」

イスに座っている者が言つた。その右手は砲身のような形をしている。

「そうでもない。数千年ぶりに目覚めた我らとしては、なかなか面白い見世物だっただろう。ギラファ」

ガザスと呼ばれた者は立ったまま腕を組んで言つた。鋭い爪と三本の角を持つその姿からは、邪悪なオーラを放っている。

「だがよお、面倒じゃねえか？ 最後のあれでリチュアとガスタが手を組んだら」

ギラファがそう言つと、

「安心しろ。すでに手は打つてある。そうだろう？ モース」

「はい。ガザス様」

ガザスが言つと、闇の中から大きな羽を持つ者が現れた。

「リチュアあの小娘の体内には、すでに私達の魔細胞を潜ませてあります。あの小娘さえ押さえれば、リチュアは無力化したも同然ですからね」

モースが薄ら笑いを浮かべてそう言つた。ガザスも小さく笑い、

「さすがは“智将”モース。的確な対応だ」

と褒め称える。

「謀略もいいけどよお、そろそろ“猛将”である俺も活躍してえぜ」
ギラファは不満気に言つた。

「心配するな。もうじきお前にも存分に働いてもらう」
ガザスがそう言つと、ギラファは満足気な笑みを作る。

「我らインヴェルズの侵略は、始まったばかりなのだから——」
そう言って、ガザスは高らかと笑った。

言葉（後書き）

とりあえず最後の最後に『インヴェルズの侵略』と言うタイトルの意味を出しました。

初めてこれを投稿した所のタイトルは『DTストーリー』だけだったんです。もちろん、最初からこう言う終わり方にするつもりだったので、最後の一行に『DTストーリー』『インヴェルズの侵略！』『編』『完』と書いてありました。

こつちでは最初からタイトルにあるので省きました。

それと分かっていると思いますが、『DTストーリー』の『DT』は『デュエルターミナル』の略ですので（↑今さら

では、最後にキャラ紹介）。今回はリチュア方面。

ガスタと比べて長々と書いてあるのは、単に自分がエリア（エリアル）が好きだからw←

エリアル

リチュアの若き長。あらゆる者と心を通わせられる天性の才能を持つ。

元々はお義兄ちゃん子でぬいぐるみが好きな女の子らしい子供だったが、リチュアの長に就任後、リチュアを導ける『大人』として振る舞うようになる。

マインドオーガスと心を通わし、その身を一体にできる唯一の存在。だが正規の方法以外でマインドオーガスと分離すると、著しく生命力が落ちてしまう。

ヴァニティ

エリアルの義兄であり育ての親。長であるエリアルの補佐官でもある。

何よりも誰よりもエリアルを第一に考える、ちょっとシスコンな義兄。^{あに}尤もそれはヴァニティだけではないが。子供らしかったエリアルを変えてしまった自責の念に駆られている。これもヴァニティだけではないが。

シャドウ

長であるエリアルとの相談役の一人。孤島の先住民である魚人の一族。

作中でのセリフは二言だけと不遇のキャラだが、『オメガの裁き』編では出番が……あるはず。

余談だがヴァニティとシャドウがエリアルを抱えていた格好である『お姫様抱っこ』の別名は『半魚人持ち』と言う。

『お姫様』と言う言葉によい印象を持たない人がつけたものだが、この場合、どちらも正しい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5865p/>

DTストーリー～インヴェルズの侵略～

2010年12月31日02時44分発行